臺灣理蕃要覽

内閣文庫
和書
類
號 三〇二三三
冊 三
架

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

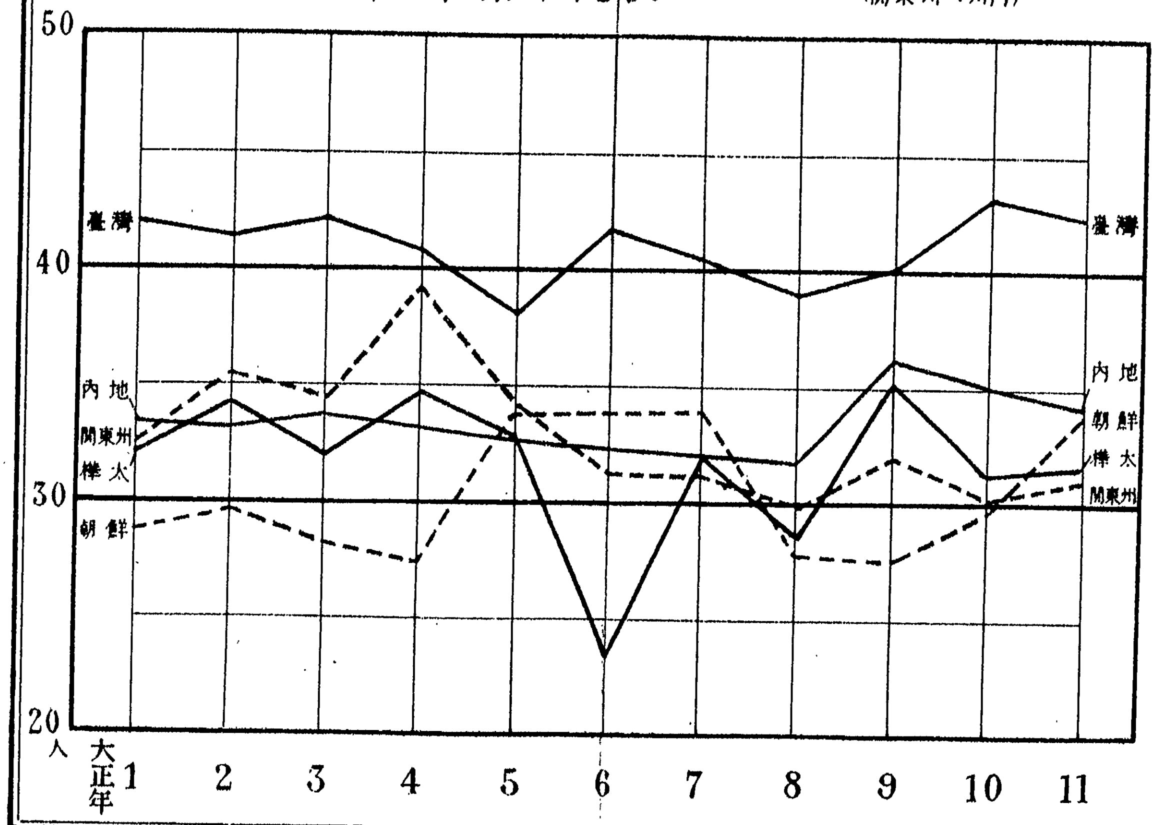
352
30233
16

臺灣現勢要覽

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

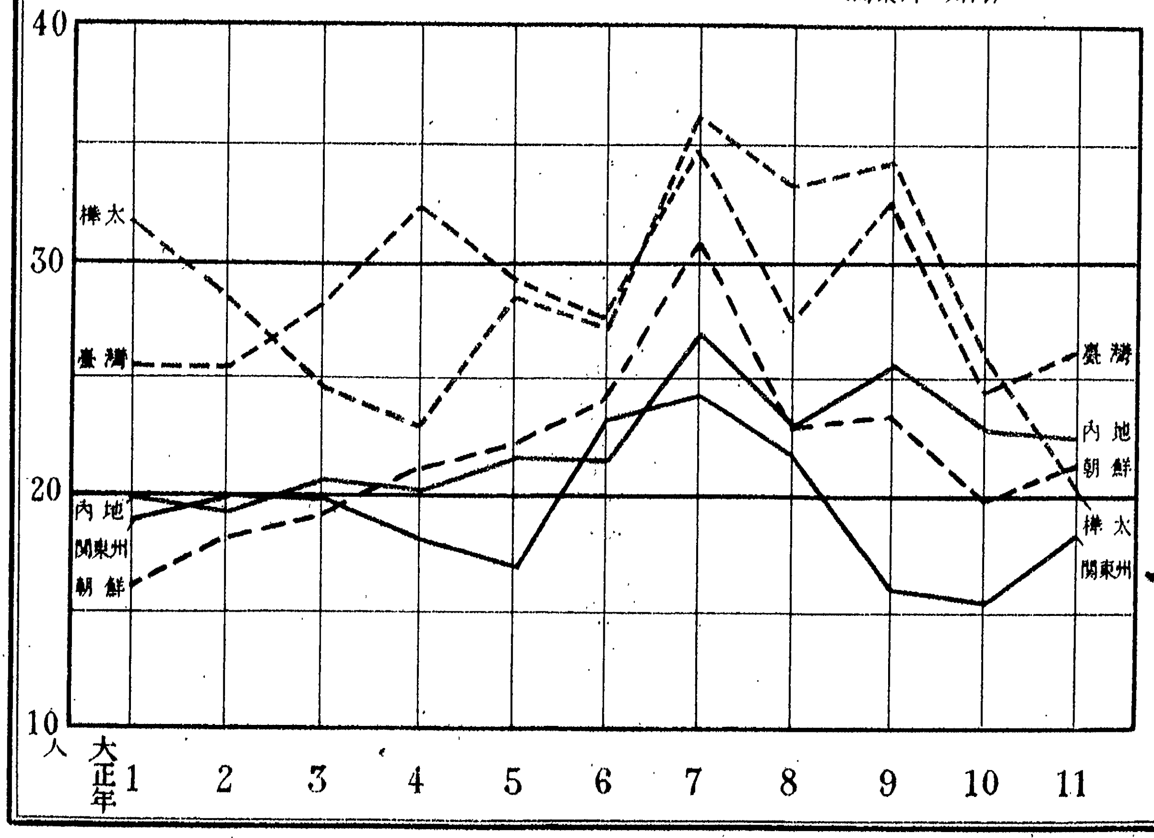
アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

生産率累年比較 (人口千ニ付)(内地ハ全管内 関東州ハ州内)



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

死亡率累年比較（人口千ニ付）（内地ハ全管内 関東州ハ州内）



アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records

凡例

一　本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんか爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。

二　本書は、大正十二年の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又大正十二年の事實不明のもの又は特に必要と認めたるものは、大正十二年以前の統計をも採りたり。

三　本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を說明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧けたり。

四　本書は、帝國に於ける臺灣の地位を說明するの便に供せんか爲め、その必要なる事項に就ては、內地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

大正十四年五月

臺灣總督府

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

臺灣現勢要覽目次

一　位置……一
二　面積……四
三　山嶽……六
四　河川……一〇
五　土地の利用……一三
六　氣溫……一四
七　雨量……一七
八　人口……二〇
九　本籍別內地人……二三
一〇　在外臺灣人……二六
一一　在留外國人……二八
一二　臺灣語を話す內地人……三〇
一三　國語を解する本島人……三二
一四　婚姻、離婚、出生、死亡……三三
一五　出生率……三四
一六　死亡率……三七
一七　人口の增加……四〇

一八　蕃人……四三
一九　行政區劃……四五
二〇　州及廳の面積……四七
二一　州及廳の人口……五〇
二二　主要都市……五三
二三　農業戸數……五七
二四　耕地面積……五九
二五　水利……六二
二六　農產……六三
二七　畜產……六五
二八　林產……六七
二九　鑛產……六九
三〇　水產……七一
三一　工產……七四
三二　糖業……七六
三三　貿易……七八
三四　對手國別外國貿易……八一
三五　支那、香港及南洋貿易……八五
三六　重要品別外國貿易……八七

三七　重要品別內地貿易……九〇
三八　港別貿易……九三
三九　財政……九五
四〇　專賣……九七
四一　銀行……九九
四二　物價……一〇一
四三　教育……一〇三
四四　衛生機關……一〇七
四五　水道……一〇九
四六　ペストとマラリヤ……一一一
四七　阿片吸食特許者……一一三
四八　鐵道……一一五
四九　郵便、電信、電話……一一七
五〇　警察官署及職員……一二一
五一　最近十二年間の進步……一二三

圖表

一　生產率累年比較
二　死亡率累年比較

臺灣現勢要覽

一　位置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に繹ぬるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百四十一浬にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峽を隔てゝ近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔てゝ遠く米大陸に相對し、南はバッシー海峽を隔てゝ近く比律賓群島に相隣す。

二　經度及緯度

				度
臺灣本島	經度(東經)	極東	臺北州基隆市棉花嶼東端	一二二・〇六
		極西	臺南州北港郡口湖庄新港西端	一二〇・〇二
	緯度(北緯)	極南	高雄州恒春郡七星岩南端	二一・四五
		極北	臺北州基隆市彭佳嶼北端	二五・三八
澎湖島	經度(東經)	極東	高雄州澎湖郡査母嶼東端	一一九・四三
		極西	高雄州澎湖郡花嶼西端	一一九・一八
	緯度(北緯)	極南	高雄州澎湖郡大嶼南端	二三・一〇
		極北	高雄州澎湖郡目斗嶼北端	二三・四六

二 距離 基隆を基點とする直航浬程

那覇	三四四浬
鹿兒島	六四一
長崎	六三三
門司	七九九
神戸(門司經由)	九六三
横濱(長崎、門司經由)	一、一七七
釜山(門司經由)	八六三
大連	八五〇
福州	一五一
厦門	二二六
汕頭	三二八
上海	四二八
香港	四七九
馬尼剌	七七六
海防(香港經由)	九六一
西貢	一、三〇〇
盤谷	一、八九五

新嘉坡	一、八五四
バタビヤ	二、六九四

二　面　積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬四千百三十五方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍〻小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれは約その六分の一に當る。尚ほ之を列國の面積に比すれは、瑞西（二千六百七十八方里）と和蘭（二千百十四方里）との中間に位す。

	面積 方里	百分比例
總數	四四、二三五	一〇〇・〇
臺灣	二、三三二	五・三
朝鮮	一四、三三三	三二・四
樺太	二、三四〇	五・三
北海道	六、一四五	一三・九
內地府縣	一九、〇〇六	四三・一

本表の外租借地として關東州（州內）の面積二百十八方里及委任統治に係る南洋群島の面積百六十三方里あり。
朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。
北海道、內地府縣は帝國統計年鑑に依る。
南洋群島は列國國勢要覽に依る。

三 山嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數五十五座を算し、就中臺灣四十八座を占め、內地は僅かに七座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。卽ち新高山は一萬三千七十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、內地第二の高山赤石山は僅かに四十五位を占むるに過ぎす。

	海面よりの高さ	順位
新高山	一三,〇七五尺	一
次高山	一二,九七三	二
秀姑巒山	一二,八五〇	三
マボラス山	一二,五六〇	四
南湖大山	一二,五五二	五
富士山(內地)	一二,四六七	六
中央尖山	一二,三六〇	七
關山	一二,二〇〇	八

大水窟山	一二,〇二八	九
蓄萊主山北峰	一一,八九五	一〇
東郡大山	一一,八九五	一一
大雪山	一一,八八〇	一二
大霸尖山	一一,七九二	一三
雲峰	一一,七七八	一四
蓄萊主山	一一,六九五	一五
東巒大山	一一,四四六	一六
合歡山	一一,三〇〇	一七
北合歡山	一一,三〇〇	一八
東合歡山	一一,二二〇	一九
南玉山	一一,一九一	二〇
桃山	一一,一六八	二一
シンカン山	一一,一五七	二二
畢祿山	一一,一五一	二三
丹大山	一一,一三四	二四
白姑大山	一一,〇五二	二五
蓄萊主山南峰	一一,〇〇五	二六
南双頭山	一一,〇〇〇	二七

能高山南峰	一一、〇〇〇	二八
卑南主山	一〇、九五五	二九
干卓萬山	一〇、九〇三	三〇
カシバナン山	一〇、八九九	三一
郡大山	一〇、八六五	三二
タロコ大山	一〇、八六三	三三
卓社大山	一〇、八二六	三四
小關山	一〇、七五〇	三五
能高山	一〇、七二三	三六
屏風山	一〇、六七二	三七
大武山	一〇、六六五	三八
尖山	一〇、六三三	三九
バトツノフ山	一〇、六〇〇	四〇
ハイノートーサン山	一〇、四七八	四一
マビーサン山	一〇、四五〇	四二
白石山	一〇、三五四	四三
ウハノシン山	一〇、三三四	四四
赤石山(内地)	一〇、三二四	四五
東俣山(内地)	一〇、三二三	四六

安東郡山	一〇、一九三	四七
巒大山	一〇、一五〇	四八
御嶽(内地)	一〇、一二八	四九
槍ヶ嶽(内地)	一〇、一〇四	五〇
關門山	一〇、〇七三	五一
大石公山	一〇、〇六〇	五二
白根嶽(内地)	一〇、〇五三	五三
小霧山	一〇、〇四三	五四
大運澤(内地)	一〇、〇〇〇	五五

内地の分は第四十二回國勢一班に依る。

四　河川

臺灣は幅員狹く、その最も廣き部分と雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峯南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むへからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四二・〇里
下淡水溪	三九・〇
曾文溪	三五・七
淡水河	三三・一
大甲溪	三〇・〇
烏溪	二八・六
八奬溪	二八・三
秀姑巒溪	二三・六
卑南溪	二一・五
大安溪	二〇・五

本表は流域二十里以上のものゝみを掲く。

五　土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬六千町歩(三百七十萬八千甲)にして、内、耕地七十五萬八千町歩(七十七萬五千甲)、林野二百五十六萬二千町歩(二百六十二萬甲)、其の他三十萬六千町歩(三十一萬二千甲)なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の三割七分二厘にして、臺灣は二割九厘を以て之に亞ぎ、樺太の五厘最も小なり。林野に於ては樺太の九割一分五厘最も大にして、臺灣は七割七厘を以て第三位を占め、關東州の九分最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは關東州の五割三分八厘にして、樺太の八分最も小なり。

	實數 耕地	實數 林野	實數 其他	百分比例 耕地	百分比例 林野	百分比例 其他
臺灣	七五八、三四一町	二、五六二、五五八町	三〇六、〇二四町	二〇九	七〇七	八四
朝鮮	四、三五〇、八六四	一五、八八三、〇〇〇	二、〇五一、八六〇	一九四	七一四	九二
樺太	一八、三五三	三、三五八、〇〇〇	二九三、三三八	〇五	九一五	八〇
關東州(州内)	一三五、九九九	三〇、四六〇	一八三、四四三	三七二	九〇	五三八
北海道	八六六、四四七	五、四四七、三〇〇	三、三九一、七六八	八六	五六九	三四五
内地府縣	五、三三三、五七五	一六、九八三、八五一	七、三六三、五六九	一七六	五七五	二四九

耕地は大正十二年末現在なり。

林野は臺灣、樺太、關東州は大正十二年度末現在、朝鮮は大正十三年五月末日現在、内地及北海道は大正十年末現在なり。

朝鮮、樺太、關東州は同總統計書に依る。

北海道、内地府縣の耕地は第四十次農商務統計表に依り、林野は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

六　氣溫

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帶圏に位するか故に、內地に比すれは夏季長く、冬季短きも、その最高氣溫は敢て內地より高しと謂ふにあらす。而も冬季は頗る暖かにして、高山ならされは降雪なく、北部の平地に於ては偶々霜を見る事なしとせさるも極て稀なり。

今內地其の他と比較するに、累年平均氣溫は我臺灣最も高きも、最高極度の氣溫に至りては內地其の他の部分却つて高し。卽ち臺東の三十九度(華氏百二度二分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)よりは一分低く、又臺北の三十七度五分(華氏九十九度五分)は京城と同しくして大阪の三十七度六分(華氏九十九度七分)よりは一分低し。更に恒春の三十四度九分(華氏九十四度八分)は大泊函館及札幌を除けは他の何れの地方よりも低し。

		大正十二年平均 攝氏度	大正十二年平均 華氏度	累年 平均 攝氏度	累年 平均 華氏度	累年 最高の極 攝氏度	累年 最高の極 華氏度	累年 最高の極 年月	累年 最低の極 攝氏度	累年 最低の極 華氏度	累年 最低の極 年月
臺灣	恒春	二四・〇	七五・二	二四・五	七六・一	三四・九	九四・八	七―六	一〇・一	五〇・二	三四―二
	臺東	二三・一	七三・五	二三・四	七四・一	三九・〇	一〇二・二	三―七	七・四	四五・三	七―一
	臺南	二三・〇	七三・四	二三・〇	七三・四	三六・九	九八・四	五―七	二・四	三六・七	七―二
	澎湖島	二三・七	七三・八	二二・五	七二・五	三三・五	九二・三	四―八	七・三	四五・一	三四―三
	臺中	二二・七	七二・九	二二・一	七一・八	三七・二	九九・〇	三五―八	(1)一・〇	三〇・二	三四―二
	臺北	二一・六	七〇・八	二一・六	七〇・九	三七・五	九九・五	四―七	(1)〇・二	三一・四	三四―二
	基隆	二一・六	七〇・八	二一・六	七〇・九	三七・四	九九・三	七―八	三・〇	三七・四	三四―二
朝鮮	釜山	一三・五	五六・三	一三・四	五六・一	三六・〇	九六・八	九―八	(1)一四・〇	六・八	四―一
	京城	一〇・八	五一・四	一〇・九	五一・六	三七・五	九九・五	八―八	(1)二三・五	(1)八・二	九―一
	城津	七・九	四六・二	七・八	四六・二	三七・五	九九・五	八―七	(1)二四・六	(1)一二・〇	八―一 四―一
樺太	大泊	二・六	三六・七	二・八	三七・〇	二八・五	八三・三	九―七	(1)三三・七	(1)二八・九	四二―一
關東州	旅順	一〇・〇	五〇・〇	一〇・一	五〇・二	三五・四	九五・七	八―八	(1)一九・五	(1)三・一	六―一 四―三
北海道	函館	八・八	四七・八	八・五	四七・三	三三・五	九二・三	三七―八	(1)二一・七	(1)七・一	二四―一
	札幌	七・二	四四・七	六・九	四四・四	三三・四	九二・一	三七―八	(1)二八・六	(1)一九・八	三六―二
	旭川	五・六	四二・〇	五・二	四一・四	三六・〇	九六・八	九―七	(1)四一・〇	(1)四一・八	三五―一
內地府縣	那覇	二二・四	七二・三	二二・一	七一・八	三三・八	九二・九	五―七	四・九	四〇・八	七―一
	長崎	一五・七	六〇・三	一五・七	六〇・三	三六・七	九八・一	三七―八	(1)五・六	二一・八	四―一

大阪	三五六	六〇	一五〇	三九〇	三七六	九九七	四三—八	(1)七二	一九六	三四—一
東京	一四三	三七五	一三八	三六八	三六六	九七九	一九—七	(1)八三	一八〇	七—一
新潟	三八	三五〇	一三六	三四七	三九一	一〇三四	四三—八	(1)九七	一七二	三五—三
青森	九六	四九三	九三	四八七	三六〇	九六八	四—八	(1)一九〇	(1)三三	三四—三

(1) は零點下を示す。

七　雨量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。卽ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き火燒寮(暖暖街より約一里)は一年六千九百粍を以て全島の第一位を占め、且つ世界有數の降雨地として知らる。南部に於ては阿里山の四千粍最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量四百八十八粍なり。

更に之を內地其の他と比較するに、臺灣は全島を通して一般に他の地方よりも降雨量多し。

	大正十二年總量粍	累年平均總量粍	大正十二年最大日量粍	大正十二年最大日量月日
臺灣				
恒春	一七三三	二一六六	三三	七—二五
臺東	一二九九	一八〇八	三三	七—二五
臺南	一六五五	一二三六	一六六	八—一三
澎湖	四八八	九七七	七七	八—一九
阿里山	三四四三	四〇〇八	三六五	八—一二
臺中	八四三	一六九五	九六	六—一九
臺北	一六九九	二〇三三	三四	八—一〇

基隆	一、八一八	二、九一八	三三五	一〇—一
朝鮮火燒寮	五、三四四	六、九三九	?	?
釜山	一、六〇〇	一、四一九	三三	五—一四
京城	一、二九五	一、三六三	三九	八—一
城津	四九〇	七〇六	四六	四—六
樺太大泊	八六〇	七五〇	五九	九—一六
關東州				
旅順	七五八	五六八	一五六	七—三
北海道				
函館	一、一五五	一、一七七	七〇	九—一五

札幌	一、一七七	一、〇三三	一一七	九—一五
旭川	一、一六八	一、〇二五	六三	九—一五
內地府縣				
那覇	二、〇五五	二、一五四	一五九	一〇—九
長崎	二、〇九四	二、三三三	一六六	八—二〇
大阪	一、三五五	一、三七〇	一〇二	六—九
東京	一、五九七	一、五六一	九八	六—九
新潟	一、九五四	一、八二二	五四	九—一三
青森	一、一七八	一、三五六	七〇	九—一二

八 人口

臺灣の總人口は大正十二年末現在三百九十七萬九千人にして、中、內地人十八萬一千人、本島人三百六十七萬九千人、蕃人八萬四千人（蕃地居住）、外國人三萬人なり。

大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、帝國の總人口は七千七百萬人を算し、臺灣は三百六十五萬人にして、實に其の四分七厘を占む。（蕃地居住の蕃人を除く）更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、智利（三百七十五萬人）と丁抹（三百二十七萬人）との中間に位す。

一 種族別人口 （大正十二年末現在）

	總數	男	女	百分比例
總數	三、九七六、一五五	二、〇五一、二六〇	一、九二四、八九五	一〇〇·〇
內地人	一八一、八四四	一〇〇、八八六	八〇、九五八	四·六
本島人	三、六七九、三三一	一、八八三、七二五	一、七九五、六〇六	九二·五
蕃人	八四、二七七	四三、一八〇	四一、〇九七	二·一
外國人	三〇、七〇三	二三、四六九	七、二三四	〇·八

本島人中には平地居住の蕃人五萬二百四十三人を合算せり。故に本表の蕃人には蕃地居住の者のみを揭上せり。

二 內地其の他との人口比較 （大正十二年末現在）

	實數	百分比例	一方里に付
總數	八四、〇八五、九三三	一〇〇·〇	一、八三三
臺灣	三、九七六、一五五	四·七	一、七〇三
朝鮮	一七、八八四、九六三	二一·三	一、二五〇
樺太	一四〇、八八一	〇·二	六〇
北海道	二、三七六、六〇〇	二·八	四四三
內地府縣	五九、六三四、九〇〇	七〇·九	二、三九四

本表の外租借地としての關東州（州內）は人口七十萬六千六百七十三人を有し、一方里に付人口三千二百四十三人及大正九年十月一日現在南洋群島は人口五萬二千二百二十二人を有し、一方里に付人口三百二十人を算す。

北海道及內地府縣は大正十二年九月一日現在なり。

朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。

北海道、內地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

南洋群島は列國國勢要覽に依る。

九　本籍別內地人

臺灣在住內地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れは、十六萬四千人にして、內熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次之に亞き其の最も少きは靑森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比例	順位
熊本縣	一六、三五三	一〇〇	一
鹿兒島	一六、二七二	九九	二
福岡	八、八九八	五四	三
廣島	八、四〇二	五一	四
山口	七、四五五	四五	五
佐賀	六、七八〇	四一	六
東京	六、四四七	三九	七
長崎	六、一〇八	三七	八
宮城	五、六七七	三四	九
大阪	四、六五五	二八	一〇
大分	四、五四四	二八	一一
兵庫	四、四六六	二七	一二

府縣	人口	百分比例	順位
新潟	四、三三〇	二六	一三
愛知	三、八八五	二四	一四
愛媛	三、七三三	二三	一五
岡山	三、六二四	二二	一六
宮崎	三、六〇〇	二二	一七
高知	三、五九九	二一	一八
岐阜	三、五〇〇	二一	一九
沖繩	三、四五三	二一	二〇
石川	三、四四八	二一	二一
香川	三、四〇一	二一	二二
福島	三、三九〇	二一	二三
島根	三、二七七	二〇	二四
靜岡	三、二五五	二〇	二五
和歌山	三、二三六	二〇	二六
京都	三、一四三	一九	二七
茨城	三、一三三	一九	二八
德島	一、九九九	一二	二九
三重	一、九五五	一二	三〇
長野	一、八七三	一一	三一

福井	一七八六	一・二	三二
千葉	一六六九	一・二	三三
神奈川	一六〇六	一・〇	三四
滋賀	一六八六	一・〇	三五
山形	一四九〇	〇・九	三六
鳥取	一三八六	〇・八	三七
富山	一三四七	〇・八	三八
山梨	一〇六三	〇・六	三九
群馬	一〇三三	〇・六	四〇
埼玉	一〇二五	〇・六	四一
奈良	一〇二五	〇・六	四二
北海道	九三三	〇・六	四三
栃木	八六五	〇・五	四四
岩手	八二七	〇・五	四五
秋田	七四六	〇・四	四六
青森	六八三	〇・三	四七

内地人總數十六萬四千二百六十六人中、内地に本籍を有せざる者二十六人、本籍不詳九人を除く。

一〇　在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にして、その大部分は支那に在留す。即ち支那在留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十人を算す。支那以外の地方に於ける在留者の中、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人之に亞ぐ。

	總數	男	女
總數	四、七八五	三、〇五五	一、七三〇
關東州	二九	二四	五
靑島	四	三	一
支那	四、二三六	二、六〇五	一、六三一
廈門	三、〇八五	一、九〇二	一、一八三
福州	七六六	四四八	三一八
汕頭	二三〇	[illegible]	[illegible]
廣東	二三	六	一七
其他	六八	五六	一二
爪哇	二一八	一一九	九九
海峽植民地	一〇五	八一	二四
新嘉坡	三三	二六	七
ジョホール州	三五	二六	九
其他	三七	二九	八
緬甸	四六	二〇	二六
香港	[illegible]	[illegible]	一五
[illegible]	[illegible]	[illegible]	一五
比律賓	二一	一九	二
濠太利	一三	一三	—
[illegible]	一	一	—

二　在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり。今之が國籍を糅ぬるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次之に亞ぐ。

總數	二三、六六四
支那	二三、四六七
英吉利	八九
北米合衆國	四二
西班牙	三八
智利	一〇
英領印度	五
ベネズエラ	四
比律賓	四
獨逸	三
露西亞	二
瑞典	二
佛蘭西	一
葡萄牙	一

丁抹	一
諾威	一
希臘	一
加奈陀	一
墨西哥	一
伯剌西爾	一
波蘭	一
濠洲	一

本表の外、外國に國籍を有せざる者七百九十九人、國籍不詳三人あり。

本表には、調査當日基隆碇泊の外國船乘組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一二　臺灣語を話す內地人

內地人にして臺灣語を話すものゝ數は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に增加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に增加したるも、その內地人千に對する割合は、大正四年の百二十二人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

	總數	男	女	指數	男女別內地人千に付 平均	男	女
明治三十八年	六八二九	六〇二〇	八〇九	一〇〇	一一九・二	一七三・八	三五・六
大正四年	一六五九一	一三四〇三	三一八八	二四三	一二二・五	一七六・九	五三・四
同　九年	一七二七三	一四〇九六	三一七七	二五三	一〇五・二	一六〇・六	四三・一

本表は第一回及第二回戶口調査竝に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一三　國語を解する本島人

本島人にして國語を解するものゝ數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に增加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に增加したるも、尙ほ本島人千に對し、僅かに二十八人六分を算するに過ぎす。

	總數	男	女	指數	男女別本島人千に付 平均	男	女
明治三十八年	一一二七〇	一〇八〇一	四六九	一〇〇	三・八	六・八	〇・三
大正四年	五四三三七	五〇一四三	四一九四	四八二	一六・三	二九・二	二・六
同　九年	九九〇六五	八〇八九七	一八一六八	八七九	二八・六	四九・五	一〇・六

本表は第一回及第二回戶口調査竝に第一回國勢調査の結果にして、何れも十月一日現在なり。

一四、婚姻、離婚、出生、死亡

臺灣に於ける最近十二年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、婚姻は大正元年の三萬七千九百より、大正十一年には三萬七千八百に減したるも、大正十二年には三萬九千四百に増加し、離婚は同しく五千より、四千三百に減し、出生は年により多少の差異あるも、大正十一年迄は大體に於て増加の傾向を有したりしが、大正十二年には十五萬四千人に減少したり。死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き十二萬五千人の多きに達したるも、大正十二年には八萬四千人に減退したり。從つて出生の死亡超過數は年により甚しき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過きさりしか、大正十二年には約七萬人に達したり。

	婚姻	離婚	出生(生産)	死亡	自然増加(出生超過)
大正元年	三七、九一九	五、〇八三	一四〇、四六八	八四、九六五	五五、五〇三
同 二年	三六、一〇七	五、一二〇	一四一、三九九	八六、六二〇	五四、七七九
同 三年	三三、九七七	四、六六四	一四六、一三六	九七、五二二	四八、六一四
同 四年	三八、五六六	五、一九五	一四三、五五五	一一三、二三三	三〇、三二二
同 五年	三七、六〇四	五、四四五	一三三、七七七	一〇二、六〇九	三一、一六八
同 六年	三八、〇五五	五、〇九八	一四八、三〇九	九七、九四九	五〇、三六〇
同 七年	四〇、九〇三	四、六六八	一四五、一六二	一二四、六七七	二〇、四八五
同 八年	三八、五四一	五、一五五	一四二、三三〇	九八、九九一	四三、三三九
同 九年	四〇、九一五	四、七一三	一四七、三六八	一二九、四四七	一七、八二一
同 十年	四〇、八六九	四、六九八	一六二、九七七	九一、五三三	七一、四四四
同十一年	三七、八二一	四、三二五	一六二、八六九	九六、四二二	六六、四四七
同十二年	三九、四八〇	四、三三八	一五四、〇〇八	八四、一〇八	六九、九〇〇

一五　出生率

臺灣の出生率は之を最近十二年間に就て觀るに、年に依りて高低常ならすと雖、大正十年には人口千に付四十三人二分を以て最高度を示す。又之を內地人のみに就て觀るに、逐年增加の趨勢にありしものか、大正七年以來降下の傾向を示せしも、大正十年には再ひ增加の傾向に復したりしか、大正十二年には復た三十五人に降下せり。本島人の出生率は特に高低常ならさりしも、大正十年には四十三人七分を以て最近十二年間の新記錄を示せしか、大正十二年には四十人に降下せり。

更に之を內地其の他と比較するに、大正十一年以前は臺灣は其の割合最も高くして、北海道と稍〻一致し、內地府縣は我臺灣に於ける內地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の三十八人四分（大正十一年）なるか故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一　出生率（人口千に付生產）

	平均	內地人	本島人	外國人
大正元年	四一九	二九八	四三五	一一八
同　二年	四二四	三〇七	四三〇	一五五
同　三年	四一二	三〇八	四一八	一〇〇
同　四年	四〇九	三三七	四一四	一八八
同　五年	三六二	三三五	三六四	一六六
同　六年	四一六	三三四	四二九	一九三
同　七年	四〇五	三五四	四〇九	二〇三
同　八年	三九二	三三二	三九六	一三一
同　九年	四〇一	三三八	四〇六	一二六
同　十年	四三二	三三一	四三七	二四五
同　十一年	四二二	三六九	四二八	二四七
同　十二年	三九六	三五〇	三九九	二〇七

二　內地其の他との出生率累年比較（人口千に付）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州（州內）	北海道	內地府縣
大正元年	四一九	二八九	三三〇	三三二	四三五	三三九
同　二年	四二四	二九七	三四三	三三二	四三五	三三七
同　三年	四一二	二八二	三三九	三四二	四〇九	三三三
同　四年	四〇九	三三三	三四七	二九一	四二〇	三三五
同　五年	三六二	三五八	三三七	三三九	四三七	三三二
同　六年	四一六	三五八	三三一	三三二	四二九	三三九
同　七年	四〇五	三四〇	三三八	三三〇	四〇四	三三三
同　八年	三九二	三三八	二八四	二九八	三三〇	三三八
同　九年	四〇一	三三六	三三一	三三八	四三三	三四七

同十年	四二・五	三九・七	三三・二	三九・九	三六・五	三四・九
同十一年	四二・五	三四・八	三三・五	三二・〇	三七・四	三四・七
同十二年	三九・六	四〇・三	三三・六	四三・四	?	?

朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依り算出す。
北海道、內地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依り算出す。

一六　死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十二年間に就て觀るに、一般に增加の傾向ありしも、大正十年には著しく低下し、更に大正十二年には人口千に付二十一人六分を以て最低の新記錄を示せり。內地人の死亡率は之を本島人に比すれは甚た低く、大正十二年には本島人二十二人一分なるに對し、內地人は僅かに十一人七分を示せり。

更に之を內地其の他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは北海道にして、關東州(州內)之に亞き、朝鮮は內地府縣と稍ゝ一致し、我臺灣は樺太と相似たる所あり。又列國中死亡率の最も高きは、智利及西班牙等にして大正十一年には智利二十八人四分、西班牙二十人五分を示せり。

一　死亡率（人口千に付）

	平均	內地人	本島人	外國人
大正元年	二五・三	一五・八	二五・八	一五・四
同二年	二五・三	一五・四	二六・八	二二・一
同三年	二六・一	一五・〇	二八・七	二五・五
同四年	三三・六	一七・三	三三・九	二九・四
同五年	二九・三	一六・〇	二九・八	二六・八
同六年	二七・五	一六・五	二八・〇	一七・七
同七年	三四・八	一九・六	三五・五	三一・七

同八年	二七五	二六八	二六八	二〇八	二四八
同九年	二五五	二〇二	二三五	二三五	二三五
同十年	二四四	二九九	二〇四	一九六	二六六
同十一年	二五〇	二三五	二五六	一九四	二九四
同十二年	二三六	二一〇	二三二	二六二	二六二

二 内地其の他との死亡率累年比較（人口千に付）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州(州内)	北海道	内地府縣
大正元年	二五五	一六〇	二二五	二〇二	二〇八	一九八
同二年	二五五	一八〇	二六五	二〇五	一九四	一九六
同三年	二六一	一九五	二四五	二一七	二〇四	二〇四
同四年	二四五	二一二	二三九	一九八	一九〇	二〇〇
同五年	二九五	二五五	二六五	一八二	二〇八	二〇四
同六年	二七五	二四二	二七二	二五〇	二〇五	二一四
同七年	二四八	二〇七	二五五	二七二	二四九	二一四
同八年	二七五	二一九	二五二	二五七	二二九	二六四
同九年	二三五	二五四	二四五	一八四	二二九	二三四
同十年	二四四	一九八	二五七	二〇七	一八二	二四六
同十一年	二五〇	二一四	二〇三	一八四	一七六	二二五

同十二年	二三六	二〇五	二四六	一八八	?	?

朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依り算出す。

北海道、内地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依り算出す。

一七 人口の增加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れは、三百萬なりしものか、大正元年には三百三十五萬に增加し、更に大正十二年には三百八十九萬に達し過去十二年間に一割六分の增加を示せり。

更に人口增加の趨勢を内地其の他と比較するに、增加の割合最も大なるは樺太にして、北海道之に亞き、關東州は第三位を占め、大正八年迄は臺灣と内地とは殆んと其の步調を一にす。

一 最近十二箇年間の人口 （各年末現在）

	總數	男	女	指數
大正元年	三、三五三、九四四	一、七六三、四〇四	一、五九〇、四九九	一〇〇
同 二年	三、四一八、七三〇	一、七九四、八〇八	一、六二三、四四二	一〇二
同 三年	三、四六八、七九九	一、八二八、〇六六	一、六四〇、六六三	一〇三
同 四年	三、四八五、三六六	一、八二四、九四四	一、六六八、三三三	一〇四
同 五年	三、五二〇、二二〇	一、八四四、一五〇	一、六八六、〇六〇	一〇五
同 六年	三、五六〇、〇五〇	一、八四六、四五五	一、七一三、六〇五	一〇六
同 七年	三、五九八、五五九	一、八六六、一七八	一、七二七、三七七	一〇七
同 八年	三、六三〇、五八五	一、八七八、八六〇	一、七五二、七五五	一〇八
同 九年	三、六七四、二九〇	一、九〇三、七九〇	一、七七〇、五〇〇	一一〇
同 十年	三、七五七、二三七	一、九四二、五八二	一、八一四、六五五	一一二
同 十一年	三、八三二、五九八	一、九七四、八二四	一、八五七、七七四	一一四
同 十二年	三、八九一、八九一	二、〇〇八、〇七〇	一、八八三、八二一	一一六

蕃地居住の、蕃人を除き、平地居住の蕃人は之を算入せり。

二 内地其の他との累年人口指數 （各年末現在）

	臺灣	朝鮮	樺太	關東州(州内)	北海道	内地府縣
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同 二年	一〇二	一〇四	一〇五	一〇二	一〇四	一〇一
同 三年	一〇三	一〇七	一一六	一〇四	一〇八	一〇二
同 四年	一〇四	一一〇	一二四	一〇八	一一〇	一〇四
同 五年	一〇五	一一三	一二七	一一一	一一四	一〇五
同 六年	一〇六	一一四	一三六	一一四	一二〇	一〇七
同 七年	一〇七	一一五	一三九	一一六	一二五	一〇六
同 八年	一〇八	一一六	一五一	一二〇	一二九	一〇七
同 九年	一一〇	一一七	一六六	一二三	一三三	一〇六
同 十年	一一三	一一八	一六四	一三一	一三四	一〇七
同 十一年	一一四	一一九	一八五	一三七	一三九	一〇九
同 十二年	一一六	一二一	一九二	一四一	一四六	一一〇

鮮朝、樺太、關東州は同廳統計書に依る。
北海道、內地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

一八 蕃人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセット、ブヌン、ツオウ、パイワン、アミ及ヤミの七種族に分つ。大正十二年末現在蕃社數は七百十九、戶數二萬二千五百六十八、人口十三萬四千人なるも、就中五萬二百四十三人は平地の蕃社に居住するか故に、實際蕃地に居住するものゝ數は八萬四千百七十七人なり。

各種族中人口最も多きはパイワン族にして、總人口の三割一分一厘を占め、アミ族の二割八分九厘、タイヤル族の二割三分五厘等順次之に亞く。

	總數	男	女	百分比例
總數	一三四、四三〇	六七、〇〇四	六七、四二六	一〇〇・〇
タイヤル	三一、六〇〇	一五、四一九	一六、一八一	二三・五
サイセット	一、一九六	六二〇	五七六	〇・九
ブヌン	一七、四〇〇	八、九一二	八、四八八	一三・〇
ツオウ	二、〇〇七	一、〇五六	九五一	一・五
パイワン	四一、八三三	二〇、九三三	二〇、九〇〇	三一・一
アミ	三八、六八九	一九、二九三	一九、三九六	二八・九
ヤミ	一、五三五	七九一	七四四	一・一

本表中、平地の蕃社に居住する蕃人五萬二百四十三人は本島人として人口統計に計上せらる。

一九　行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を經たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改正を加へたり。卽ち從來の十二廳を五州二廳に改め、現に五州は之を五市四十六郡に分ち、郡の下には三十二街、二百二十六庄を置き、二廳は之を七支廳に分ち、支廳の下には二街一庄十九區を置き、以て從來の行政區域を全く一變したり。

	郡	支廳	市	街	庄	區
全島	四六	七	五	三四	二二七	一九
臺北州	九	―	二	五	三四	―
新竹州	八	―	―	四	三九	―
臺中州	一一	―	一	一〇	四〇	―
臺南州	一〇	―	一	八	六九	―
高雄州	八	―	一	五	四四	―
臺東廳	―	四	―	一	―	一一
花蓮港廳	―	三	―	一	一	八

本表は大正十三年十二月末現在とす。

二〇　州及廳の面積

五州二廳中、面積の最大なるは、臺中州の四百七十八方里餘にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北の順序を以て之に亞き、臺東廳は二百二十四方里を以て最小の地位を占む。

今之を內地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、臺南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及臺北州は和歌山、京都の中間に、臺東廳は鳥取、佐賀の中間に位す。

一　州及廳の面積

	面積	百分比例
全島	二、三三三・九九方里	一〇〇・〇〇
臺北州	二六六・〇三	一一・七
新竹州	二九八・一六	一二・八
臺中州	四七八・七一	二〇・五
臺南州	三五一・五一	一五・一
高雄州	三八三・〇七	一六・四
臺東廳	二二四・八三	九・六
花蓮港廳	三二〇・一〇	一三・九

二 內地府縣との面積比較

	面積（方里）	順位
熊本縣	四八二·九九	二三
臺中州	四七八·七一	二四
宮城縣	四七三·四五	二五
山口縣	三九四·六四	二六
高雄州	三八三·〇七	二七
三重縣	三六九·七〇	二八
愛媛縣	三六九·五〇	二九
臺南州	三五一·五一	三〇
千葉縣	三三九·三九	三一
和歌山縣	三〇六·八五	三二
花蓮港廳	三〇〇·一〇	三三
新竹州	二九八·一六	三四
臺北州	二九六·〇三	三五
京都府	二九五·五六	三六
鳥取縣	二二六·九四	三七
臺東廳	二一四·八三	三八
佐賀縣	一五八·四三	三九

順位は、一道三府四十三縣及州、廳の面積の順位を示す。

二　州及廳の人口

五州二廳中、人口の最多なるは臺南州の百萬六千人にして、臺中州は八十五萬四千人を以て之に亞き、以下臺北、新竹、高雄、花蓮港、臺東の順序を以てし、一方里の人口は同しく臺南州二千八百六十三人を以て最高度を示し、花蓮港廳の二百八人最も低し。

今之を內地府縣に比較すれは、臺南州は山口、山形の中間に、臺中、臺北の兩州は大分、靑森の中間に、新竹州は滋賀、山梨の中間に、高雄州は山梨、沖繩の中間に位し、花蓮港及臺東の兩廳は、人口餘りに少くして比較すへき類似の府縣なし。

一　州及廳の人口　（大正十二年末現在）

	實數	百分比例	一方里に付
全島	三、九七六、〇九八	一〇〇・〇	一、七〇五
臺北州	八〇一、五三三	二〇・二	二、七〇七
新竹州	六〇二、一七六	一五・一	二、〇二〇
臺中州	八五四、一四三	二一・五	一、七八四
臺南州	一、〇〇六、四五一	二五・三	二、八六三
高雄州	五九七、〇八五	一五・〇	一、五九九
臺東廳	五三、二七五	一・三	二三四
花蓮港廳	六三、四四六	一・六	二〇八

本表中には蕃地居住の蕃人を含む。

二　內地府縣との人口比較　（內地府縣は大正十二年九月一日現在推計）

	人口
山口縣	一、〇五八、〇〇〇
臺南州	一、〇〇六、四五一
山形縣	九六九、八〇〇
大分縣	八七二、一〇〇
臺中州	八五四、一四三
臺北州	八〇一、五三三
靑森縣	七八一、六〇〇
滋賀縣	六五五、五〇〇
新竹州	六〇二、一七六
山梨縣	六〇三、〇〇〇
高雄州	五九七、〇八五
沖繩縣	五九六、九〇〇
花蓮港廳	六三、四四六
臺東廳	五三、二七五

內地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

二三　主要都市

臺灣には三市、三十六街あり。就中人口二萬以上の市及街は二十にして、その第一位を占むるは臺北市の十八萬六千、之に亞ぐは臺南市の八萬三千、基隆街の五萬六千、嘉義街の四萬二千、高雄街の三萬九千　臺中市の三萬八千、新竹街の三萬六千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに八千二百、同しく花蓮港街は七千百を有するのみなり。（大正十二年末現在）

次に州及廳の所在地たる三市、四街を內地其の他の都市に比較するに大正九年十月一日現在に依れは、我か臺北市は東京、大阪、神戶、京都、名古屋、橫濱、京城、長崎の八市に亞ひて實に第九位を占め、廣島市の上に位し、臺南市は和歌山、靜岡兩市の中間に、高雄街は四日市、弘前兩市の中間に、新竹街及臺中市は弘前、大津兩市の中間に位す、而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豐原よりも少し。

一　主要都市の人口　（大正十二年末現在）

	總數	內地人	本島人	外國人	順位
臺北市（臺北州）	一八六、七六八	五〇、七七七	一二二、八五二	一三、一三九	一
臺南市（臺南州）	八三、四四七	一三、七八九	六七、一一三	二、五四五	二
基隆街（臺北州）	五六、三六八	一四、三〇六	三九、三五五	二、七〇七	三
嘉義街（臺南州）	四二、三九三	六、一七四	三五、三一七	九〇二	四
高雄街（高雄州）	三九、八〇四	一〇、一三六	二八、八〇〇	八六八	五

臺中市（臺中州）	三八、〇五四	九、九七七	二七、四四六	七二	六
新竹街（新竹州）	三六、三七七	三、八〇五	三二、一六五	四九九	七
鹿港街（臺中州）	三一、九六六	二、四五三	二九、三二七	一六六	八
斗六街（臺南州）	二九、八九一	八五三	二八、九五五	一三五	九
大溪街（新竹州）	二九、六二〇	四〇〇	二九、一六二	三八	一〇
清水街（臺中州）	二九、五五五	三六〇	二五、一八五	四〇	一一
麻豆街（臺南州）	二四、三七八	四七一	二三、七六八	二九	一二
屏東街（高雄州）	二四、三三三	二、九七三	二〇、七三二	三六八	一三
埔里街（臺中州）	二三、五六四	一、三七四	二二、〇八〇	三〇〇	一四
豐原街（同）	二三、九九九	五四三	二三、三五三	一三三	一五
員林街（同）	二三、四四一	五〇三	二一、九五五	一三五	一六
南投街（同）	二三、四四〇	六七三	二〇、八〇四	六二	一七
宜蘭街（臺北州）	二一、三九九	一、八六八	一九、三五八	一八五	一八
淡水街（同）	二一、二三三	七一〇	二〇、三三六	三七	一九
馬公街（高雄州）	二〇、四五二	二、三〇五	一八、二二四	三五五	二〇
臺東街（臺東廳）	八、三一四	一、六五一	六、三五一	三五三	二一
花蓮港街（花蓮港廳）	七、二〇〇	三、四五三	三、四〇一	三三七	二二

本表には、人口二萬以上の市及街のみを擧け、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港兩街を掲く。

二　内地其の他の都市との人口比較（大正九年十月一日現在）

京城	二五〇、二〇八	
長崎	一七六、五三四	
臺北	一六三、七六二	（一六六、七六八）
廣島	一六〇、五一〇	
和歌山	八五、三〇〇	
臺南	七七、三六〇	（八五、四九七）
靜岡	七四、〇九三	
釜山	七三、八五五	
平壤	七一、七〇三	
四日市	三五、一六五	
高雄	三四、〇五三	（三九、八五〇）
弘前	三二、七六七	
新竹	三一、九三四	（三六、三七七）
臺中	三一、三五九	（三八、〇五四）
大津	三一、四三三	
大泊	一〇、四六六	
豐原（樺太）	八、三五四	

臺東	(八、三二四)	六、九八四
花蓮港	(七、一六〇)	五、七五五

括弧內の數字は大正十二年末現在なり。
朝鮮、樺太は大正九年末現在にして、同廳統計書に依る。
內地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

三三　農業戸數

臺灣の農業戸數は三十八萬八千戸にして、總戸數の約五割三分を占め、農業者一戸當平均耕地面積は一町九段（約二甲）に當る。

今之を內地其の他と比較するに、總人口に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割九分四厘にして、臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割七分餘を以て最下位に在り。

農業者一戸當平均耕地面積の最も大なるは北海道の四町八段にして、樺太の二町五段之に亞き臺灣は第四位を占め、內地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

	農業戸數	總戸數百に付農業戸數	農業戸數一戸當耕地面積
臺灣	三八八、四四三	五三・九	一・九町
朝鮮	二、七〇三、八八八	七九・四	一・六
樺太	七、三四四	二七・〇	二・五
關東州(州內)	五三、一九五	四〇・八	二・四
北海道	二〇七、三五九	四五・五	四・八
內地府縣	五、五六六、四九一	四四・三	一・〇

本表は大正十二年末の事實とす。
北海道、內地府縣の總戸數は平均一世帶人口を以て算出す。
朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。

北海道、内地府縣は第四十次農商務統計表に依る。

二四　耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十五萬八千町歩（七十七萬四千甲）にして、内、田三十六萬八千町歩（三十七萬六千甲）畑三十八萬九千町歩（三十九萬七千甲）なり。

今之を内地其の他と比較するに、耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは、關東州の三割七分二厘にして、臺灣は之に亞ぎ、朝鮮の一割九分四厘はその第三位を占む。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

	耕地面積 總數	田	畑	百分比例 田	畑	總面積に對する耕地面積の割合
臺灣	七五八、二三一町	三六八、四八八町	三八九、八〇三町	四八·六	五一·四	二〇·九
朝鮮	四、三三〇、八〇四	一、五四九、四四一	二、七八一、四〇三	三五·九	六四·一	一九·四
樺太	一六、八六一	—	一六、八六一	—	一〇〇·〇	〇·五
關東州（州內）	一三五、九九九	四九六	一三五、四〇三	〇·四	九九·六	三七·二
北海道	八二六、四四七	一一八、一三〇	七〇八、三一七	一四·三	八五·七	八·六
内地府縣	五、三五三、五七六	二、九八八、三九九	二、三六四、一七七	五六·八	四三·二	一五·六

本表は大正十二年末の事實とす。

朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。

北海道、内地府縣は第四十次農商務統計表に依る。

二五　水　利

臺灣に於ける埤圳の數は、一萬二千二百三にして、內、水利組合九十六、公共埤圳七、認定外埤圳一萬二千百なり。又其の灌漑面積は三十三萬七千甲にして、內、其の五割は水利組合の灌漑に屬す。

	埤圳數	灌漑面積	灌漑面積百分比例
總數	一二、二〇三	甲 三三七、六一八	一〇〇・〇
水利組合	九六	一八二、七九九	五四・一
公共埤圳	七	五九、〇七六	一七・五
認定外埤圳	一二、一〇〇	九五、七四三	二八・四

本表は大正十三年四月一日現在の事實とす。

二六 農産

臺灣の農產物は大正十二年中の總生產價額一億六千二百六十萬圓にして、內、普通作物一億三百二十萬圓、特用作物四千百九十萬圓、園藝作物千七百四十萬圓なり。更に之を作物別に觀るに、米は八千五百六十八萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は三千百九十八萬圓を以て之に亞き、甘藷の千五百五十五萬圓、蔬菜類の七百二十七萬圓、芎蕉の六百二十九萬圓、茶の六百二十九萬圓、落花生の百七十三萬圓、柑橘の百三十七萬圓、豆類の百三十五萬圓等順次之に亞ぐ。

	生產價額	生產價額百分比例	作付面積	收穫高
總額	162,593,599円	100.0	甲	
普通作物	103,203,748	63.5	—	—
米(玄米)	85,683,600	52.7	553,579	4,866,087石
甘藷	15,551,085	9.6	135,563	1,644,853,068斤
豆類	1,348,051	0.8	36,394	93,309石
小麥	345,330	0.2	23,359	15,800石
其他	274,782	0.2	—	—
特用作物	41,955,869	25.8	—	—
甘蔗	31,980,587	19.7	126,600	6,652,865,814斤

	生產價額	生產價額百分比例	作付面積	收穫高
茶	6,391,898	3.9	45,820	22,642,099斤
落花生	1,734,653	1.1	33,005	353,230石
煙草	845,768	0.5	1,099	2,759,355斤
黃麻	532,414	0.3	2,443	5,537,443斤
苧麻	662,443	0.4	1,650	1,864,923斤
胡麻	231,231	0.1	4,333	13,789石
藍	173,181	0.1	1,820	23,591,499斤
其他	384,863	0.2	—	—
園藝作物	17,403,735	10.7	—	—
芎蕉	6,983,106	4.3	23,831	184,376,834斤
柑橘	1,369,447	0.8	23,259	33,534,668斤
龍眼	669,225	0.4	3,854	28,832,758斤
檳榔	350,280	0.2	667	7,750,809斤
鳳梨	335,787	0.2	1,621	2,294,778箇
檨仔	186,441	0.1	1,284	7,573,332斤
李	147,427	0.1	309	7,055,340斤
蔬菜	7,276,427	4.5	—	—
其他	165,665	0.1	—	—
蠶繭	62,189	0	—	—

二七 畜産

臺灣の畜產物生產總價額は大正十二年に二千九百萬圓を算し、內、家畜生產二千四百七十萬圓、家禽生產四百萬圓、牛乳二十九萬圓なり。

家畜生產中、豚は二千二百七十萬圓を以て第一位を占め、水牛の百二十六萬圓之に亞き、家禽生產中第一位を占むるは鷄の三百十六萬圓なり。

類	生產價額	生產價額百分比例
總額	二九、〇三三、六六八円	一〇〇・〇
家畜	二四、六九二、六〇三	八五・一
水牛	一、二六〇、二三五	四・三
黄牛	三六八、二二六	一・三
其他の牛	九一、七三五	〇・三
豚	二二、六九〇、八〇七	七八・二
山羊	二五八、九九九	〇・九
其他	三一、三九〇	〇・一
家禽	四、〇四八、六六〇	一三・九
鷄	三、一六二、九五一	一〇・九
鶩	六四七、〇〇八	二・二

鵞	三四〇、三四六	〇・八
七面鳥	八、四五五	〇・〇
牛乳	一一九、三六六	〇・二

二八 林産

臺灣の林產物生產總價額は大正十二年に一千二百萬圓を算し、內、官行生產價額三百五十萬圓、一般生產價額八百六十萬圓なり。

官行生產價額中第一位を占むるは丸太の百九十萬圓にして、一般生產價額中にては薪の二百九十萬圓第一位を占む。

	價額	價額百分比例
總額	三、二九〇、一六九円	一〇〇・〇
官行生產價額	三、五五九、九六六	二九・二
丸太	一、八九九、一〇七	一五・六
製材	一、五九九、六〇九	一三・一
副生品	六一、二五〇	〇・五
一般生產價額	八、六〇三、二〇三	七〇・八
木材	一、八六三、三五四	一五・四
竹材	一、二四九、九一四	九・四
籐	一七六、五八五	一・四
木炭	九六〇、一六〇	七・九
薪	三、九〇三、三一〇	三二・八
筍	五〇四、四四三	四・一

蓮草	一四、五〇七	〇·一
薯榔	三七、八〇七	〇·三
姜黄	三、三三五	一·七
其他	八三、七三二	六·七

官行生產價額には營林所に於ける賣拂價額を揭上す。

二九 鑛産

臺灣の鑛產總價額は大正十二年に一千二百九十萬圓を算し、內、石炭は總產價額の八割強、卽ち一千百四十萬圓を以て第一位を占め、金は五十四萬圓を以て之に亞き、銅の五十萬圓、石油の十八萬圓等順次之に亞ぐ。

	產額	價額	價額百分比例
總額	—	一二、九三〇、八六三円	一〇〇·〇
石炭	一、四四四、九三二噸	一一、四二五、五〇〇	八八·四
金	一〇九、七七三匁	五四八、八六五	四·三
銅	二、一七八、一五八斤	五四〇、九六四	四·二
石油	一四〇、一九石	一八六、七四三	一·四
金銅鑛	一、三四八、六〇一貫	一四七、〇三八	一·一
銅鑛	一三三、一四〇貫	四、九五五	〇
硫黄	一、八八四、四八八斤	四五、八〇七	〇·三
銀	一五一、八八七匁	二四、八八三	〇·二
砂金	三、三三五匁	七、九六五	〇·一
砂鐵	三三、三三三斤	一四三	〇

三〇 水産

臺灣の水産總價額は大正十二年には一千五百八十萬圓以上に達し、内、水産漁獲物九百萬圓、養殖場漁獲物百九十萬圓、水産製造物三百三十萬圓、製鹽百五十萬圓なり。

更に之を品目別に觀れば、鰹節の二百三十萬圓第一位を占め、鮪仔の百六十萬圓、加納魚、卓鰡の各百五十萬圓、虱目魚の百十五萬圓等順次之に亞ぐ。

	價額	價額百分比例
總額	一五、八〇四、三〇五円	一〇〇・〇
水産漁獲物	九、〇三〇、六五一	五七・一
加納魚	一、五四〇、五六八	九・七
卓鰡	一、五四六、九〇八	九・八
鰮仔	七〇三、三七一	四・五
沙仔魚	七五七、七六五	四・八
烏魚	四八八、八六八	三・一
塗托	一四三、〇六九	〇・九
鮪仔	一、六七九、八五七	一〇・六

其他	二、三八一、一三五	一四・四
養殖物漁獲物	一、九四三、五六五	一三・三
風目魚（サバヒー）	一、三五七、〇五五	七・五
鯔魚（ツウヒー）	一八六、四八九	一・二
草魚（ツアウヒー）	一〇六、七八〇	〇・七
蚵仔（オーアー（カキ））	二五八、八二五	一・九
烏魚（オオヒイ（ボラ））	七六、八〇七	〇・五
鯉魚（タイヒイ（コヒ））	六六、三五七	〇・四
其他	四八、三六二	〇・三
水產製造物	三、三九九、五一四	二〇・九
鰹節	二、三六一、四〇三	一四・九
煮干鰮	五六〇、七八七	三・三
蒲鉾	一五一、〇三一	一・〇
鯎仔（カリスミ）	八六、六八九	〇・五
鯖鯖	九一、九九五	〇・六

其他	二四七、五二九	一・六
製鹽	一、五三〇、四七五	九・七

三　工産

臺灣の工業總生産價額は大正十二年に二億四百萬圓を算し、內、砂糖の一億四千萬圓は群を拔いてその第一位を占め、再製茶の九百萬圓、酒精の四百五十萬圓、セメントの四百萬圓等順次之に亞ぐ。

	生産價額	生産價額百分比例
總額	二〇四、一二一、五一六円	一〇〇・〇
砂糖	一四一、七九五、〇三三	六九・五
酒精	四、五三三、五五七	二・二
再製茶	九、一三八、一七五	四・五
鐵工及鑄物等	三、三六五、八三三	一・六
木製品	三、〇四五、五二六	一・五
セメント	四、一四三、七八四	二・〇
染色	一、八三九、六六五	〇・九
麵類	二、〇九六、七五五	一・〇
煉瓦	一、四八一、三六一	〇・七
調合肥料	二、一六八、八七一	一・一
金銀細工	一、二七七、二〇四	〇・六
味噌及醬油	一、八〇三、八九三	〇・九

	生産價額	生産價額百分比例
油及油糟	二、三三六、六九〇	一・一
敷瓦及屋根瓦	八一六、二九七	〇・四
金銀紙	八八三、九〇五	〇・四
製粉	一、八三四、四二三	〇・九
綿布、麻布類	一、六九六、三三三	〇・八
糖蜜	四、七五〇、三八四	二・三
帽子	八五〇、九七二	〇・四
靴	八三〇、二七五	〇・四
板狀樟腦	一、六三八、七一三	〇・八
其他	一三、〇四四、五五五	六・〇

三二　糖業

臺灣の糖業は大正十三年期に於て、公稱資本額二億七千萬圓、作業工場數百六十一、許可作業能力三萬五千五百七十九英噸を有し、其の製糖高七億五千三百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十四、許可作業能力三萬三千三百五十九英噸を有し、その製糖高七億三千八百萬斤を算す。

	公稱資本金	作業工場數	許可作業能力	製糖高	製糖高百分比例
總數	二七一、二〇〇、〇〇〇円	一六一	三五、五七九英噸	七五三、六六二、六六四斤	一〇〇・〇
新式製糖會社	二七一、二〇〇、〇〇〇	四四	三三、三五九	七三八、七七七、六九八	九八・〇
臺灣製糖	六三、〇〇〇、〇〇〇	一〇	八、一〇五	二六七、〇一〇、〇一〇	三二・二
東洋製糖	三六、二五〇、〇〇〇	六	四、三七〇	九四、七四三、七三〇	一三・六
明治製糖	二七、五〇〇、〇〇〇	五	四、七九五	一〇四、七四四、六〇〇	一三・九
帝國製糖	一八、〇〇〇、〇〇〇	五	三、八八八	七七、七三〇、六〇〇	一〇・三
新高製糖	二八、〇〇〇、〇〇〇	五	三、九三三	六三、一九一、九〇〇	八・四
鹽水港製糖	三五、〇〇〇、〇〇〇	六	四、五〇〇	九五、五八〇、三二八	一二・七
大日本製糖	二七、二五〇、〇〇〇	三	三、三〇〇	八八、一九九、四五〇	一〇・九
臺南製糖	三〇、三五〇、〇〇〇	二	一、一七〇	六七、三九八、四四	〇・九
新竹製糖	七、五〇〇、〇〇〇	一	五〇〇	三、六九三、三〇〇	〇・五
林本源製糖	三、〇〇〇、〇〇〇	一	七五〇	二六、七七六、一〇〇	三・六
沙轆製糖	二、五〇〇、〇〇〇	一	三〇〇	四、五四七、一〇〇	〇・六
臺東製糖	一、七五〇、〇〇〇	一	三五〇	三、三三七、一八七	〇・五
新興製糖	一、三〇〇、〇〇〇	一	五〇〇	九、五三〇、五〇〇	一・三
改良糖廍	—	一三	一、一八〇	六、七三四、〇三六	〇・九
舊式糖廍	—	一〇四	一、〇四〇	八、三三一、一四九	一・一

大正十三年期とは大正十二年十一月より同十三年十月に至る期間を云ふ。

三三　貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及內地貿易（臺灣內地間貿易）の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減產と一般商況の不振に依り少しく減退したるも、大正五年には世界大戰の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破し、翌大正九年には三億八千九百萬圓と云ふ新記錄を作り、之を大正元年に比すれば實に二十一割の增加にして、人口一人當百六圓を算す。然るに大正十年及同十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退したりしも、大正十二年には復た三億圓臺に上れり。

次に貿易總額に對する內外兩貿易の割合を觀るに、內地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一　貿易總表

	總額	指數	外國貿易	內地貿易	百分比例 外國貿易	百分比例 內地貿易	平均一人當
大正元年	千圓 一二五、六四四	一〇〇	千圓 三四、三六七	千圓 九一、二七七	二七・三	七二・七	圓 三七・四
同　二年	一一四、三四八	九一	三〇、九六六	八三、三八一	二七・一	七二・九	三三・四
同　三年	一二一、〇六三	九六	三五、九九六	八五、〇六七	二九・七	七〇・三	三三・二
同　四年	一三九、〇三四	一一一	三八、三一三	一〇〇、八二二	二七・五	七二・五	三七・〇
同　五年	一七一、五三〇	一三七	四七、〇八五	一二四、三七六	二七・五	七二・五	四四・五
同　六年	二三四、九九一	一八七	六一、三三五	一七三、三七六	二六・一	七三・九	六〇・九
同　七年	二四五、八九六	一九四	六八、九九九	一七六、八九七	二八・五	七一・五	六〇・〇
同　八年	三五三、五五六	二八五	九九、七三五	二五三、八〇一	二八・〇	七二・〇	九〇・六
同　九年	三八八、七〇三	三一〇	九九、五四〇	二八九、一六三	二五・六	七四・四	一〇五・八
同　十年	三六六、三五五	二八八	六三、九七五	三〇二、三八〇	一七・五	八二・五	八六・五
同十一年	三七六、九六〇	三〇一	七七、四八五	二九九、四七五	二〇・六	七九・四	九三・五
同十二年	四〇八、七五四	三二六	六八、三一四	三四〇、四四〇	一六・九	八三・一	九九・三

二　外國貿易

	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正元年	千圓 三四、三六七	一〇〇	千圓 一四、八六〇	千圓 一九、五〇七	千圓 四、六四七
同　二年	三〇、九六六	九〇	一二、八四一	一八、一二四	五、二八三
同　三年	三五、九九六	一〇五	一三、八八三	二二、一一三	八、二三〇
同　四年	三八、三一三	一一一	二〇、三四一	一七、九七二	(1) 二、三六九
同　五年	四七、〇八五	一三七	二四、三五五	二二、七三〇	(1) 一、六二五
同　六年	六〇、三二五	一七九	四〇、二一六	二〇、一〇九	(1) 一九、一二六

同七年	六六、九九九	一五五	三三、三九四	三三、五五五	一六一
同八年	九九、七五五	二三一	五五、六三三	四四、一二五	一一、五〇八
同九年	九〇、五四〇	二〇九	五五、一七五	三五、三六五	一九、八一〇
同十年	七五、九七五	一八〇	三五、五四三	四〇、四三五	一四、八九二
同十一年	七三、四五五	一七〇	三〇、五六三	四三、九二三	一三、三五八
同十二年	六八、三六四	一五九	二九、一五三	三九、二一一	九、九五九

(1)は輸出超過なり。

三 内地貿易

	總額（千圓）	指數	移出（千圓）	移入（千圓）	移出超過（千圓）
大正元年	九二、一五七	一〇〇	四七、八三二	四四、三二五	三、五〇六
同二年	八三、三八三	九一	四〇、四四七	四二、八三六	(1)二、三八九
同三年	八五、六六七	九四	四五、七三八	三九、八九九	五、八四〇
同四年	一〇〇、八八二	一一一	六〇、一九三	四〇、六八八	一九、五〇五
同五年	一三〇、三八七	一四三	八〇、六八五	四九、五九二	三一、〇九四
同六年	一七四、三三六	一九〇	一〇五、三五八	六七、七七八	三七、八〇〇
同七年	一九六、九八七	二一四	一〇五、九九二	七四、六九五	三五、三九七
同八年	二三二、五七一	二五五	一四三、三三八	八九、五三三	五一、一六六
同九年	二九二、二六二	三二一	一八一、〇九三	一三一、〇七〇	六九、〇三三

同十年	三三三、四二八	三六四	一三八、八七七	一九四、五五一	(1)五五、六七四
同十一年	三九九、四七五	四三〇	一七七、三〇一	二二二、一七四	(1)四四、八七三
同十二年	三四〇、四八〇	三六八	一六九、四八一	一七一、〇〇八	(1)九八、四五四

(1)は移入超過なり。

三四　對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り。卽ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘、多きは四割四分を占め、輸入貿易に於ては更にその割合大にして、少きも三割四分、多きは四割九分を占む。

今大正十二年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額六千八百萬圓中、輸出額は二千九百萬圓にして、就中支那の一千萬圓最も多く、總額の三割六分に當り、北米合衆國の六百六十萬圓、香港の四百十萬圓、蘭領印度の三百十萬圓等順次之に亞く。輸入額三千九百萬圓中第一位を占むるは支那の一千七百五十萬圓にして、總額の四割五分に當り、北米合衆國の六百三十七萬圓、蘭領印度の四百萬圓、關東州の三百七十萬圓、英吉利の百九十五萬圓、英領印度及海峽植民地の百六十萬圓等順次之に亞く。

一　輸出

	大正十二年 千円	同十一年 千円	同十年	同九年 千円	同八年 千円	同六年 千円	同元年 千円
總額	二九,一五三	三〇,五〇三	二三,五四二	三五,一七三	三五,六三三	四〇,三二六	一四,九六〇
支那	一〇,五三六	一〇,三〇〇	九,一七八	一二,八九三	一三,二〇八	一四,三九九	四,三六四
北米合衆國	六,五九七	七,六九一	三,三三一	六,八三三	七,〇二一	五,五五八	四,九一七
香港	四,一七三	四,三三三	四,五六九	六,〇三三	五,三三五	八,一四三	三九三
蘭領印度	三,一八九	三,二九四	三,〇六五	二,八九一	一,八五五	三,三七七	三
佛蘭西	一,〇四九	三四二	二二三	三八五	三四四	九九	六六二
英吉利	八四一	一,〇三三	一〇五	一,三五九	九九〇	七三〇	一,〇八七
比律賓諸島	三九四	四三一	四四五	三,〇二三	一,七〇六	八〇	五三
關東州	七三	六三二	二三八	三四	七二一	一,四九七	一三
英領印度及海峽植民地	一八四	二三〇	三五六	六六二	五一六	六三四	三四五
其他諸國	一,四八九	二,三〇九	一,九三三	三,〇八一	五,〇三七	六,八二九	三,一八五

二　輸入

	大正十二年 千円	同十一年 千円	同十年 千円	同九年 千円	同八年 千円	同六年 千円	同元年 千円
總額	三九,二一二	三六,九三三	四〇,四三三	六〇,三六七	六四,一二三	二〇,〇九九	一九,三〇七
支那	一七,四九八	一八,三三九	一九,四六五	二八,七三四	二八,六七三	九,三九八	六,七六七
蘭領印度	四,〇三三	三,五〇一	六,五八八	一〇,三三七	四,四〇七	三四六	三〇七
北米合衆國	六,三七一	三,三〇一	四,九六九	五,五六七	三,四四三	二,一四八	一,七〇〇
英領印度及海峽植民地	一,六四〇	一,二三一	一,七一六	三,〇四三	三,七一八	三,九七七	三,三三九
關東州	三,七〇八	三,〇六五	一,七六五	四,四八一	三,七七三	八七三	一,三三八
波斯	三九二	三五六	九二八	二,九九四	三,三〇一	一,五九二	一,四〇五
英吉利	一,九五八	一,四六五	二,六八九	九六八	一,七五五	一,〇七八	三,四九〇

佛領印度	一、二一四	二〇一	一四四	三三九	一、一三三	八九九	三三九
暹羅	二〇四	四三五	二七一	二四九	六六九	二一三	一〇三
其他諸國	三、〇八四	五、一〇九	三、〇二七	四、六六六	一五、六四三	六六六	一、六九〇

三五　支那、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要の地位を占む。卽ち大正十二年に就て觀るに、輸出額は一千九百七十六萬圓にして、輸出貿易總額の六割七分八厘を占め、輸入貿易は二千四百四十萬圓にして、輸入貿易總額の六割二分四厘に當れり。

一　輸出

	大正十二年 千圓	同十一年 千圓	同十年 千圓	同九年 千圓	同八年 千圓	同六年 千圓	同元年 千圓
總額	一九、四八一	一九、六九七	一八、七三九	二四、一七五	三三、四〇〇	二七、〇二七	五、三四八
支那	一〇、五三六	一〇、三〇〇	九、一六八	一二、八九三	二三、一〇八	一四、三九九	四、二〇四
香港	四、一一三	四、三三三	四、五九九	六、〇〇三	五、三三三	八、一四五	三九五
南洋	五、〇六三	五、〇七四	五、〇三三	六、三三九	四、九六七	四、四七五	四九一

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度、暹羅及濠太剌利を謂ふ。以下同し。

二　輸入

	大正十二年 千圓	同十一年 千圓	同十年 千圓	同九年 千圓	同八年 千圓	同六年 千圓	同元年 千圓
總額	二四、四四五	二六、八四八	三九、一四四	四三、三四〇	二八、八三五	一四、八九三	九、九四三

支那	一七,四四八	一八,三三九	一九,四六五	一八,七三四	一八,六六三	九,五九八	六,七七〇
香港	八六	七二	二一四	七一	六五	六三	一一九
南洋	六,八六七	五,三五八	九,五六八	一三,五九九	一〇,九〇七	五,四三三	二,〇五六

三　比例（大正十二年）

	外國貿易總額に對する割合 輸出	外國貿易總額に對する割合 輸入	支那香港南洋貿易總額に對する百分比例 輸出	支那香港南洋貿易總額に對する百分比例 輸入
總額	六七·八	六·四	一〇〇·〇	一〇〇·〇
支那	三六·一	四·八	五三·三	七七·七
香港	一四·三	〇·三	二一·一	〇·四
南洋	一七·四	一·四	二五·六	二一·九

三六　重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、砂糖、石炭、樟腦、酒精等なり。今大正十二年に就て之を觀るに、茶は一千萬圓を以て第一位を占め、石炭の五百七十萬圓、樟腦の三百三十萬圓、砂糖の二百四十萬圓等順次之に亞ぐ。次に輸入品の主要なるものは、豆油糟、砂糖、阿片、木材及板、石油、包蓆、豆類等にして、大正十二年には豆油糟の七百六十五萬圓第一位を占め、砂糖の四百四十五萬圓、豆類の二百五十七萬圓、木材及板の二百三十五萬圓、包蓆の百八十八萬圓　阿片の百五十萬圓、石油の百三十六萬圓等順次之に亞ぐ。

一　輸出

	大正十二年（千圓）	同十一年	同十年	同九年	同八年	同六年	同元年
茶	一〇,〇〇八	九,五五三	七,九四五	六,四〇〇	八,二九九	四,五七〇	一,六六四
砂糖	二,四〇〇	二,八三二	二,三三五	六,九〇七	七,五九八	一,五七五	一,七一九
石炭	五,六九五	五,七一九	六,五八二	八,九八二	八,〇三七	一,八三三	一一八
樟腦	三,三〇五	四,四四八	二六〇	四,三五五	三,〇七四	四,六三九	四,五〇〇
燐寸	二三七	二六八	五四五	一,三六四	三,二一五	一,七六九	二一八
綿織物	四四四	一,二〇七	一,三〇三	二,二七一	一,二四〇	一,四六三	九九
乾魚及鹹魚	五五五	五九六	九一七	七八五	六二一	一,七三一	一一七

	大正十二年	同十一年	同十年	同九年	同八年	同六年	同元年
苧麻	五六五	四〇六	四五二	六六八	六六〇	七七〇	三九九
酒精	一,三〇〇	一,六五五	一,七〇二	一,三〇一	一,二〇七	二六六	二五四
龍眼	四六〇	三三五	三五五	四四三	二一〇	三八八	三三四
鯣及乾烏賊	三五三	三五四	六〇七	二八八	三八八	三三四	四五一

二 輸入

	大正十二年	同十一年	同十年	同九年	同八年	同六年	同元年
	千円	千円	千円	千円	千円	千円	千円
豆油粕	七,六〇七	七,八〇三	六,三四四	一三,三六八	一〇,一三三	四,四五三	一,九〇七
砂糖	四,四四四	六,九九九	五,三〇七	二,一九九	一,五七四	二	一,〇六八
阿片	一,五三二	一,六六九	一,二〇五	六,〇〇三	六,四三四	三,八六八	三,〇九四
米	二六六	四五〇	一,三三二	三,九六八	七,四九九	四五〇	一,二三四
木材及板	三,三三三	三,四四六	三,三〇八	三,六〇三	一,七五五	六九九	七五五
石油	一,三九九	一,五七四	一,九〇七	一,九三二	三,三三六	八〇〇	七六六
包蓆	一,八〇〇	一,三九九	五五五	一,三三三	三,四四八	一,七四三	四五七
煙草	四〇七	九〇二	八〇七	一,七三三	一,六九九	三三三	九〇七
豆類	三,五九八	三,九〇八	一,四九三	一,八〇四	九〇四	三一三	三三九
紙	七四三	八〇三	一,三三六	一,一〇七	七〇七	五一〇	五五四
綿織物	四〇〇	五九四	五九九	三六八	八〇五	六〇五	一,二〇六
小麥粉	三三	九〇四	一,〇一二	三三八	三,三三八	一	三三九

	大正十二年	同十一年	同十年	同九年	同八年	同六年	同元年
織[illegible]	七六七	一,一七〇	三六八	一,三〇四	九六六	一,〇〇七	一,〇〇四
ガンニー嚢(故共)	一,九九九	三三九	三九五	七三六	四四四	一,二九〇	一,一〇〇
麻織物	七三四	四〇三	六〇三	七〇四	七三一	三九〇	一九四

三七　重要品別內地貿易

臺灣の內地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、芭蕉實(バナナ)、樟腦及樟腦油、木材及板類、酒精、鰹節等なり。今大正十二年に就て之を觀るに、砂糖は一億一千百八十萬圓を以て第一位を占め、米の二千三百六十萬圓、芭蕉實の八百二十八萬圓、樟腦及樟腦油の五百二十萬圓、木材及板類の三百三十萬圓、酒精の三百萬圓、鰹節の百八十四萬圓等順次之に亞ぐ。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、各種機械及同部分品、鹹魚及乾魚、肥料、鐵、酒類、紙、米等にして、大正十二年には綿織及絹織布六百四十七萬圓を以て第一位を占め、各種機械及同部分品の四百三十萬圓、鹹魚及乾魚の四百二十五萬圓、鐵及各種肥料の各四百六萬圓、酒類の三百四十萬圓、紙の二百十七萬圓、米の百九十七萬圓等順次之に亞ぐ。

一　移出

	大正十二年 千圓	同十一年 千圓	同十年 千圓	同九年 千圓	同八年 千圓	同六年 千圓	同元年 千圓
砂糖	一一一、八〇九	八四、四九九	八四、七〇九	一三五、三三四	九七、一一三	六八、三四五	二八、一三四
米	二三、六一七	一三、五八二	一九、三九四	一七、一二八	二四、四九二	一三、六二八	一〇、三五七
酒精	三、〇〇五	一、七〇七	五、八〇一	九、九六三	三、四四九	八、五〇七	一、三五九
樟腦及樟腦油	五、二一四	四、六八〇	三、四九四	四、八四九	三、七四〇	二、八〇〇	三、三五〇
芭蕉實	八、二八〇	六、八六六	四、二三六	一、八〇六	二、〇三〇	一、二〇一	三五七

	大正十二年 千圓	同十一年 千圓	同十年 千圓	同九年 千圓	同八年 千圓	同六年 千圓	同元年 千圓
銅	七七〇	二、〇九八	一、九六六	九七〇	九七七	一、五二五	二、〇九三
茶	二六六	一、四〇〇	五六八	三九三	三三三	八四四	一四四
木材及板材	三、三二七	一、五三五	五九六	一、四〇八	五〇一	三、九八四	—
鰹節	一、八四三	一、八〇五	一、三八八	九五四	七〇四	五七七	一九
石炭	一、八四一	一、七九〇	二、五九九	一、六六八	九五一	五〇三	—
鳳梨罐詰	八九五	八〇〇	八〇五	八〇〇	三九九	二九九	三
麻織物	五〇五	六三五	七二九	四九四	五三五	三一三	—
生皮	二九九	一四八	三三三	三七七	三九三	四九一	三九九

二　移入

	大正十二年 千圓	同十一年 千圓	同十年 千圓	同九年 千圓	同八年 千圓	同六年 千圓	同元年 千圓
綿織及絹織布	六、四七二	六、四二一	七、七〇七	六、〇三九	八、一三三	六、六九八	五、〇一六
各種機械及同部分品	四、三〇四	五、五九九	八、六〇一	二、〇七四	八、五六八	三、四九六	一、七一四
各種肥料	四、〇五五	四、四一四	四、五五六	七、九七〇	六、五〇九	六、〇九八	一、五三四
鹹魚及乾魚	四、二五五	四、一八三	四、九六一	六、四〇三	六、八二四	五、一三六	三、〇五四
鐵	四、〇六五	四、三六三	六、〇四一	五、九〇九	四、三四〇	四、四〇七	一、八〇〇
酒類	三、四〇五	五、四四八	六、二一五	四、八六五	五、二一八	二、三〇六	一、九六六
木材及板材	一、八四三	二、八九五	四、四〇〇	七、七一三	二、三五三	二、〇五三	三、四七一

金屬製品	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
建設材料	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
穀粉及澱粉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
燐寸	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
紙	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
米	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
鐵製品	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
煙草	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
セメント	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

三八　港別貿易

大正十二年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額三億八百萬圓を港別に觀れば、基隆の一億五千萬圓第一位を占め、總額の四割九分七厘に當り、高雄の一億四千萬圓之に亞て四割五分一厘を占め、安平の八百三十萬圓、淡水の三百萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも僅かに總額の五分二厘を占むるに過ぎす。

今之を内地其の他の諸港に比較するに、基隆は横濱、神戸、大阪、大連、釜山に亞て第六位を、同じく高雄は第七位を占めて共に釜山と仁川との中間に在り。更に安平は小樽と鹿兒島との中間に、淡水は伏木と青森との中間に位ひす。

	總額（千円）	輸出（千円）	輸入（千円）
横濱	一、一八三、八六九	六六八、六六二	五一五、二〇七
神戸	一、四三四、〇三九	四二六、一一二	一、〇〇七、九二七
大阪	四七〇、〇五五	二九八、七〇〇	一七一、三五五
大連	三四七、二〇三	二五四、四九九	九二、七〇四
釜山	一六七、三九三	九三、七八四	七三、六〇九
基隆	一五三、二三八	八六、七七八	六六、四六〇
高雄	一四九、三四八	一〇八、二三五	四一、一一三
仁川	九三、二九一	四九、七六八	四三、五二三
小樽	三一、七〇四	八、八六六	二二、八三八

安平	八,〇七〇	三六一	七,七〇九
鹿兒島	六,八四八	七一	六,七七七
伏木	三,八五五	一〇四	三,七五一
淡水	三,一〇三	二七六	二,八二七
青森	二,九三四	—	二,九三四

臺灣及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。
朝鮮、關東州は同顧統計表に依る。
北海道、内地府縣は第四十三回帝國統計年鑑に依る。

三九 財政

臺灣總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしが、爾來年と共に其の額を增大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓を以て新記錄を作りたり。然るに大正十年度よりは更に減退を示し、大正十三年度には九千百五十九萬圓を豫算せり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は年に依り多少の高低あるも少きは三割九分、多きは七割一分を占む。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に增加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に增額したりしも、大正十二年度には八千七百萬圓に減退し大正十三年度には九千百萬圓を豫算せり。

	歳入 總額	歳入 租税	歳入 官業及官有財産收入	歳入 其他	指數	歳入百分比例 租税	歳入百分比例 官業及官有財産收入	歳入百分比例 其他	歳出	指數
	千円	千円	千円	千円					千円	
明治三十八年度	二五,四四四	七,三五五	一三,九二九	四,一〇一	一〇〇	二九・一	五四・八	一六・一	二〇,四四三	一〇〇
大正 元年度	六〇,二九六	一三,四九四	二四,七三〇	二二,〇七二	二三七	二二・四	四一・〇	三六・六	四七,二一九	二三一
同 六年度	六五,四四五	九,九六九	三六,九七七	一八,四九九	二五七	一五・二	五六・五	二八・三	四六,一〇七	二二六
同 七年度	八〇,三〇一	一一,三五六	三九,八六八	二九,四四六	三一七	一四・一	四九・七	三六・二	五五,三三五	二七一

同 八年度	一〇〇、一六六	一五、三三〇	四五、六六九	三九、三〇七	三九四	一五三	四五六	三九三	七三、三三三	三五四
同 九年度	一一九、一四六	一四、三〇三	五一、八四六	四五、〇〇〇	四六九	三〇四	四三五	三六一	九五、三三四	四六六
同 十年度	一三一、〇五六	一三、三五九	四三、九六五	四六、八二一	四四一	一九〇	三九三	四一八	九四、五三〇	四六三
同 十一年度	一三五、四三三	一九、〇二七	五九、六七七	四四、七四九	四四六	一六八	三三六	三〇六	九六、三四七	四七一
同 十二年度	一二一、〇九八	一七、六七五	六五、一三〇	三八、三〇五	四三七	一五九	四八六	三五五	八〇、七九九	四三九
同 十三年度	九一、五四四	一五、〇四〇	六五、〇六六	一二、四七九	三六〇	一六四	七一二	一三五	九一、八五五	四四八

本表中大正十一年度迄は決算、大正十二年度は現計、大正十三年度は豫算なり。

四〇 專賣

臺灣の專賣は現在、阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施とす。今最近十二年間に於ける專賣の賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものが、大正六年度には二千萬圓を超ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の九百萬圓より三百萬圓に減退したる爲め、總額も二千三百萬圓に低下したりしが、大正十一年度には稍〻景況を回復したると、酒專賣實施の結果總額三千二百萬圓に達し、大正十二年度には三千七百萬圓に增加せり。

	總額	阿片烟膏	食鹽
大正元年度	円 一六、九二〇、三二一	円 六、〇三七、八三六	円 七四七、九二三
同 二年度	一六、三三〇、六三九	五、八八六、四〇〇	八〇八、九二三
同 三年度	一五、一四一、八六五	五、六六五、八六四	八九六、四六九
同 四年度	一六、三五三、五五七	五、八〇〇、七三四	八七三、九七八
同 五年度	一八、六六四、二三八	六、五九〇、一五三	九五三、九三五
同 六年度	二〇、三五八、五六三	六、九二四、三七七	一、一八〇、四六五
同 七年度	二三、六四七、〇〇三	七、五五三、一四五	一、〇九三、三〇五
同 八年度	二五、七六四、六五四	七、六二一、九四三	九七九、〇八五
同 九年度	三〇、四八四、三一七	七、七〇八、三三五	九九七、七七八

同十年度	三三、四九〇、〇六六	六七、三六〇、六二四	一七、五四五、六七七	
同十一年度	三三、七五二、〇四七	六六、六八八、三七七	一八、〇一〇、三〇七	
同十二年度	三七、七一一、四六八	五六、四〇〇、六五五	二三、二六八、八一三	

	樟腦	煙草	酒	指數
大正元年度	五、六八〇、六〇七円	四、五五三、八四四円	—円	一〇〇
同二年度	四、九一六、三〇八	四、七一九、一〇九	—	七七
同三年度	五、〇一三、〇九三	四、五四九、四五三	—	九五
同四年度	四、八〇四、五四六	四、六六八、三六九	—	九六
同五年度	五、七八〇、八〇一	五、三二六、三四九	—	一一〇
同六年度	六、四四三、三五八	五、八二一、三四三	—	一二〇
同七年度	六、〇五五、六五五	六、九九五、八六八	—	一二八
同八年度	七、四四六、六〇三	九、七〇九、五五四	—	一五三
同九年度	九、五四〇、七一三	一三、四三七、五三三	—	一八〇
同十年度	一三、三二五、七六六	一二、六五八、九九九	—	二三八
同十一年度	七、七三一、四八三	一〇、七四六、三六九	六、五四〇、六九二	一九四
同十二年度	一〇、七九九、三九八	一〇、七五五、一四四	八、一三五、五七九	二三三

四一 銀行

臺灣に於ける銀行は、大正十二年十二月末現在に依れば行數七(内、日本勸業銀行及三十四銀行は支店)にして、其支店數四十二、資本金一億一千五百萬圓、(拂込金九千四百九十萬圓)、準備金一千六百萬圓、純益金八百萬圓、預金八千三百萬圓、貸出金三億七百萬圓なり。

	支店	公稱資本金	準備金	純益金	預金	貸出金
臺灣銀行	一三	千円 二五、八二一	千円 一六、〇五〇	千円 八、〇三一	千円 八一、七五四	千円 一五七、四〇六
日本勸業銀行	一四	三〇、〇〇〇	三、九八〇	四、九七七	三六、三八〇	二〇〇、三五三
臺北支店	一	三二、三一一	—	一、二九五	一二一	五四、七五三
華南銀行	—	一〇、〇〇〇	三三	二五九	二、三二七	一六、〇六六
臺灣商工銀行	一五	一六、〇〇〇	一、一七〇	八三三	二三、六三九	三一、〇八八
彰化銀行	一〇	六、〇〇〇	一、七三六	三三一	九、〇四一	一一、八六九
臺灣貯蓄銀行	—	一、〇〇〇	—	二二	二、一四〇	四四
三十四銀行臺灣支店	二	五〇〇	—	一三六	九、八〇八	九、九六三
總數						

預金及貸出金は島内に於ける事實のみを掲く。

日本勸業銀行支店及三十四銀行支店の資本金は本島各支店に於ける元金を掲く、但し勸業銀行支店元金は毎月末本店勘定の平均額なり。

四二　物價

臺灣の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戰局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしが、翌大正十年以降は稍々低落の趨勢に在り。卽ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十二箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

	米	甘藷(白)	麥麺(太)	米麺(太)	醬油(内地式)	牛肉(牛赤)	豚肉	木炭	薪
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	—	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同二年	九三	九五	九八	九五	一〇〇	九三	一〇五	一〇三	一〇七
同三年	七六	八〇	一一四	九三	一〇二	一二四	九三	一〇三	一〇七
同四年	八六	九四	一一四	七九	九六	八九	七九	八六	九三
同五年	九五	八六	一一四	八五	一三四	九一	八四	一〇七	一二五
同六年	八四	七五	一二七	九八	一四三	一三三	九一	一二四	一四一
同七年	一二八	一四〇	一二二	一三〇	一五五	一五五	一五三	一二四	一五三
同八年	一九九	一四一	一三〇	一三九	一四六	一四六	一八〇	一二一	一六三
同九年	一六〇	一四三	一二六	一八五	一四九	一九九	一二八	一二九	一三三
同十年	一三三	一六六	一二二	一三九	一五三	一五三	一四二	一二四	一二五
同十一年	一七七	一二四	一五五	一六六	一四七	一六八	一五三	一七三	一六〇
同十二年	一三〇	一三五	一三七	一三一	一四八	一三二	一三六	一二七	一七三

四三　教育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内臺人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校の八百二十一校、兒童二十三萬六千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の十七校、生徒五千二百人、師範學校は三校、生徒千八百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、工業學校、商業學校の十一校、生徒千八百人、專門教育機關たる醫學專門學校、高等農林學校、高等商業學校、商業專門學校の四校、生徒八百人、私立各種學校十六校、生徒二千三百人、書房百二十二、生徒五千三百人あり。

次に初等教育機關を内地其の他と比較するに、人口千に對する小學校兒童數は内地府縣の百五十四人一分最も多く、關東州の百一人最も少く、我臺灣は百二十六人四分を以て僅かに關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公私立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂及公立普通學堂兒童の人口千に對する割合は、樺太の九十七人三分最も多く、我臺灣は五十七人九分を以て之に亞き、朝鮮は僅かに十七人六分を以て最下位に在り。

一　教育機關　（大正十三年三月末日現在）

	學校數	教員數	生徒又は兒童數	教員一人に付生徒
醫學專門學校	一	六二	三七八	六三

高等農林學校	一	三六	一五五	五三
高等商業學校	一	三六	一七三	六九
商業専門學校	一	二五	三三	八八
高等學校	一	八	三三	六八
師範學校	三	六四	一、八〇三	一九九
中學校	八	二八	二、四四〇	一九一
高等女學校	八	一四三	二、六〇一	一六六
農林學校	一	二六	三三三	一四四
工業學校	一	五一	四四二	八〇
商業學校	二	三三	六三五	一六六
小學校	一三四	七五六	三二、九九〇	二〇四
公學校	六六八	五、〇五七	二一三、一九五	四三三
實業補習學校	七	二六	五四三	三三三
私立各種學校	二八	三八	二三七	一〇三
書房	三三	一四	五二八五	三〇四

學校數(小學校及公學校は分教場を含む)、教員は大正十三年三月末日現在にして其の生徒又は兒童數は同三月一日現在なり。

二 內地其の他との初等教育比較

	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童	教員一人に付兒童	人口千に付兒童
小學校						
臺灣	一三四	七五六	二三、九九〇	一七九	三〇四	一五六四
朝鮮	四四〇	一、六九四	五三、七〇一	一二一六	三一一	一三〇八
樺太	五四	四七一	一九、〇五五	二三七	四〇五	一四〇三
關東州	四九	六二四	二〇、五三一	四一八八	三三四	一〇一〇
北海道	一、五六一	七、八四一	三六九、〇八七	二四九五	四九六	一四九九
內地府縣	二四、〇〇一	一八一、六五五	八、四四八三、九一九	三五三四	四四五	一五四一
公學校						
臺灣	六六八	五、〇五七	二一三、一九五	三二九九	四二三	五九九
朝鮮	一、〇九九	六、一四九	二〇六、五六八	一八八	四九八	一七六
樺太	六	七	一四四	二九〇	二四九	七五五
關東州	一二八	五九八	二三、七〇九	一七四	二六〇	三五七

公學校の朝鮮は官公私立普通學校、樺太は土人教育所、關東州は官立公學堂及公立普通學堂の事實なり。

人口千に付兒童算出の基數は、小學校に在りては內地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の兒童は大正十三年三月一日現在なり。
朝鮮は大正十二年度末(兒童は大正十三年三月一日)現在にして大正十二年朝鮮總督府統計年報に依る。
樺太は大正十二年度末現在にして第十六回樺太廳治一班に依る。
關東州(州內、州外、領事館)は大正十二年末現在にして、關東廳第十八統計書に依る。
北海道、內地府縣は大正十年度末(兒童は大正十一年三月一日)現在にして第四十三回帝國統計年鑑に依る。

四四　衞生機關

臺灣には大正十二年末現在、官立十二、公立十九、私立七十四、計百五の醫院と、八百八十二名の醫師と、五百八十三名の醫生と、四百八名の產婆を有す。醫師醫生一人に對する人口は全島平均二千六百五十七人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千百四十八人、最も多きは高雄州の三千四百六十一人なり。

	醫院 官立	醫院 公立	醫院 私立	醫師及醫生 總數	醫師及醫生 醫師	醫師及醫生 醫生	產婆	醫師醫生一人に付人口
總數	一二	一九	七四	一、一六五	五八二	五八三	四〇八	二、六五七
臺北州	三	七	二四	三六一	二五二	一〇九	一二四	二、三〇六
新竹州	一	一	八	二三五	八〇	一五五	二四	二、一四八
臺中州	一	二	一〇	三〇二	一八〇	一二二	八〇	二、七五五
臺南州	二	六	一八	二三七	一三一	一〇六	一一三	三、〇七四
高雄州	三	二	五	一六四	一一三	五一	五五	三、四六一
臺東廳	一	—	—	一五	一五	—	二	二、七六四
花蓮港廳	一	一	九	二二	二二	—	二三	二、五五五

醫生とは明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄內に於て醫師を業と爲す者とす。
本表の外藥劑師七十六名、齒科醫師八十七名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道の總數は二十四箇所にして、其の所管は臺灣總督府所管一（恒春種畜支所）、陸軍省所管三（臺東、玉里、パロン）、州所管二（高雄、屏東）、廳所管一（花蓮港）にして其の他は總て所在市街庄の經營に係る。

大正十二年度末現在給水戸數は、計量器の設備なき分の中六箇所を除き、專用栓給水戸數三萬一千六百七十七戸、共用栓給水戸數二萬三千六十四戸にして、同年度中の消費水量は同しく二千六百五十六萬餘立方米なり。

名稱	給水開始年月	年度末現在 專用栓戸數	年度末現在 共用栓戸數	年度中消費水量（立方米） 總數	年度中消費水量（立方米） 計量供給	年度中消費水量（立方米） 放任供給
淡水	明治三二年三月	四二六	一一五	七一四、〇三〇	四一〇、〇三〇	三〇四、〇〇〇
基隆	同 三五年三月	三、一五四	二、三七八	一、五四八、四五五	—	一、五四八、四五五
彰化	同 四一年四月	四六八	三〇三	三五六、〇〇〇	一五〇、三六〇	二〇五、六四〇
臺北	同 四二年四月	一八、九三五	一三、八二三	二、二五三、三四六	一、三九九、四六九	八五三、八七七
北投	同 四四年六月	七七	六	一二〇、六九九	三〇、〇〇〇	九〇、六九九
士林	同 四四年九月	一五五	一五六	八五二、六〇〇	—	八五二、六〇〇
大甲	同 四五年六月	二五五	一二〇	四四三、五〇〇	一〇〇、五〇〇	三四三、〇〇〇
斗六	大正元年八月	一二三	一四	六六六、三三五	六六六、三三五	—
高雄	同 二年四月	一、七一四	一、〇六六	二、六六八、四一〇	七〇三、八六五	一、九六四、五四五

嘉義	大正三年二月	九六五	二、〇八六	一、八四三、五四九	五七二、五五五	一、二七〇、九九四
三星	同三年三月	三三	二四〇	六〇、三九八	—	六〇、三九八
臺中	同五年五月	二、一九九	三三七	二、四二一、八〇〇	五三六、〇六六	一、八八五、七三四
屏東	同五年一一月	四六〇	四六六	七九一、七一五	一七九、三八四	六一二、三三一
豐原	同一〇年九月	三三〇	九八	二七四、八五一	—	二七四、八五一
花蓮港	同一一年一月	四四〇	三九九	五八三、三六九	一三九、一一七	四四四、二五二
臺南	同一一年四月	一、四〇七	一、〇四七	二、五七六、五五八	四五九、六九二	三、一〇六、八六六
新化	同一一年四月	三三	六四	八九、五四六	一四、四四八	七五、〇九八
埔里	同一二年六月	四九八	四九八	三〇四、九〇九	一四、八二七	二九〇、〇八二

本表の外金山、坪林、臺東、バロン、恒春(種畜支所)、玉里の六水道あるも、計量器の設備なく爲に消費水量不明に付之を除く。

四六　ペストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衞生設備の完成と共に、近年其の面目を一新し、ペストの如き大正七年以來全く之れが發生を見ず。又マラリアの如きも其の死亡數は年に依りて增減ありと雖、一般に減退の傾向を示し、明治三十九年に於て人口千に付死亡數三人二分一厘なりしものが、大正十二年には一人八分四厘に減退し、其の實數に於ても同年間に三割二分を減したり。

	死亡實數		指數		人口千に付死亡	
	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア	ペスト	マラリア
明治三十九年	三、五三四	一〇、五六二	一〇〇	一〇〇	〇・七七	三・二一
同　四十年	二、四四八	一二、七一五	七七	一二一	〇・九九	三・七七
同　四十一年	一、〇六四	一一、七四〇	四三	一一一	〇・三四	三・七三
同　四十二年	八四四	一〇、三三三	三四	九八	〇・二七	三・二六
同　四十三年	三五	九、一〇四	一	八六	〇・〇一	二・九三
同　四十四年	三六一	七、九四九	一四	七五	〇・一一	二・四三
大正　元年	一八七	六、九九九	七	六六	〇・〇六	二・〇六
同　二年	一三五	六、五七二	五	六二	〇・〇四	一・九三
同　三年	四九四	八、八八五	一九	八四	〇・一四	二・五六
同　四年	六四	一三、三五〇	三	一二六	〇・〇三	三・八五

同 五年	二	一二、三四八	〇	一〇七	〇	三三三
同 六年	三三	九、七三九	〇	九二	〇	二七三
同 七年	—	八、二九二	—	七九	—	三三一
同 八年	—	八、二〇六	—	七七	—	三三三
同 九年	—	七、七六〇	—	七三	—	三二一
同 十年	—	七、〇四〇	—	六〇	—	一八六
同 十一年	—	八、九一六	—	六四	—	二三三
同 十二年	—	七、一六四	—	六八	—	一八四

四七　阿片吸食特許者

臺灣總督府は阿片問題に就ては嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者と認むる者に限り其の吸食を許可し、漸次之か絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近つきつゝあり。卽ち之を最近十二年間に就て觀るに、阿片吸食特許者(本島人)の數は八萬七千三百七十一人より三萬九千四百六十三人に減少したり。

	總數	男	女	指數	總數（特許年齡以上の本島人百に付）	男	女
大正元年	八七、三七一	七五、九九九	一一、三七二	一〇〇	五三	八八	一四
同 二年	八一、二六八	七一、二二一	一〇、〇四七	九三	四九	八三	一三
同 三年	七六、九九五	六六、八四〇	一〇、一五五	八八	四六	七七	一三
同 四年	七一、七二五	六二、一二六	九、五九九	八二	四五	七六	一三
同 五年	六六、八四七	五七、八三九	九、〇〇八	七七	四三	七〇	一三
同 六年	六二、三一七	五三、八二八	八、四八九	七一	三九	六五	一二
同 七年	五五、七六二	四八、一九八	七、五六四	六四	三五	五九	一〇
同 八年	五二、〇六三	四四、八九〇	七、一七三	六〇	三三	五五	〇九
同 九年	四八、〇一二	四一、三五五	六、六五七	五五	二八	四七	〇八
同 十年	四四、九二三	三八、六八〇	六、二四三	五一	二六	四四	〇七
同 十一年	四三、一八六	三六、三五四	六、八三一	四九	二四	四一	〇七

同	十二年	三九四五	三三九六五	五四四八	四五	二五	三九 一〇六

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみなり。

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、大正十二年度末には官設鐵道(阿里山鐵道を含む)の營業哩數五百二十二哩に達し、外に私設鐵道千二百八十哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして、內營業線は三百哩なり。

今之を內地其の他と比較するに百方里に付鐵道營業線の哩數は關東州の二百九十三哩三分最も多く、我臺灣の六十六哩一分之に亞ぎ、樺太の五哩九分最も少く、更に人口萬に付哩數は樺太の九哩九分最も多く、朝鮮は一哩未滿にして最も少く、臺灣は二哩一分なりて內地の上に在り。

	營業線路延長(哩) 總數	官設	私設	百方里に付哩	人口萬に付哩
臺灣	八二二	五二二	三〇〇	六六一	二一
朝鮮	一、五五三	一、一八九	三六四	一〇六	〇八
樺太	一五九	一五九	—	五九	九九
關東州	六九	—	六九	二九三三	七〇
北海道	一、三三五	一、二三六	九九	二〇〇	四五
內地府縣	七、三〇八	五、四四二	一、八六六	三八五	一三

朝鮮、樺太、關東州は大正十二年度末にして同總統計書に依る。
北海道、內地府縣は大正十年度末(平均營業哩)の事實にして第四十三回帝國統計

年鑑に依る。

四九　郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、大正十二年度に於て通常郵便は引受五千六百萬、配達六千萬、電信は發信百二十五萬、著信百二十九萬、爲替は振出二千三百八十萬圓、拂渡千六百十萬圓、貯金は預入一千三十萬圓、拂戻九百九十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬一千十八、年度中加入者發信通話度數は四千三百六十萬、公衆電話發信通話時數二十一萬あり。

今之を內地其の他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口千に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは北海道、最も少きは朝鮮なり。

一　郵便　電信、爲替、貯金及電話

通常郵便	引受	五六、〇五五、五五五
	配達	五九、六六九、〇九八
	人口十に對する引受	一四・一
電信	發信	一、二五三、二三四
	著信	一、二九一、二八五

	人口十に對する發信	三五
爲替	振出	三五、七九三、四六八圓
	拂渡	一六、一三八、六五〇圓
	人口十に對する振出	六二一円
貯金	預入	一〇、三八九、一四四圓
	拂戻	九、九三八、四九八圓
	人口十に對する預入	三六四円
電話	年度末現在加入者數	一二、〇六八
	年度中加入者發信通話度數	四五六、〇七〇、四五五
	人口千に付加入者數	三六
	加入者一に付通話度數	三、九九六
	公衆電話發信通話時數	三三〇、三九九
	人口千に付公衆電話發信通話時數	四四〇

二　内地其の他との比較（大正十二年度）

	人口十に對する 通常郵便引受	電報發信	爲替振出	貯金預入	電話 人口千に付加入者數	加入者一に付通話度數
臺灣	一四二	三五	六二一円	三三九円	三八	三、九九八
朝鮮	九九	一八	六〇二	三〇七	一五	三、九六六
樺太	二、二五五	六四一	二、二九七	三〇八	一六六	四、七五五
關東州	四八七	三五	一、八九七	七六八	一四一	六、九九一
北海道	六六八	三一	四九三	二三九	八五	五、〇七七
内地府縣	六五五	一五	一三七	一四六	七五	三、九八四

朝鮮、樺太、關東州は大正十二年度の事實にして同廳統計書に依る。北海道、内地府縣の郵便、電信、電話は大正十二年度通信要覽に依り、爲替は大正十一年度の事實にして第四十三回帝國統計年鑑に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は大正十二年末現在に依れは、州警務部五、廳警務課二、警察署四、警察分署一、郡警察課四十七、支廳七、派出所及駐在所千三百九十一にして、同職員の數は警視二十一人、警部及警部補五百五十九人、巡査七千百三十二人なり。

今之を內地其の他と比較するに、一方里に對する巡査の數は、關東州の四人七分最も多く、臺灣は三人一分を以て之に亞き、巡査一人に付人口は北海道の千百二十七人第一位を占め、內地府縣の千四十九人之に亞き、我臺灣は五百五十八人を以て僅かに樺太の上に在り。

	警察署	警察分署	派出所及駐在所	職員 警視	職員 警部及警部補	職員 巡査	一方里に付巡査	巡査一人に付人口
臺灣	五八	一	一、三九一	二一	五五九	七、七三二	三一	五五八
朝鮮	二五一	—	二、四九九	四四	一、一九二	一八、一八八	一五	九三二
樺太	六	四	一六七	—	二七	三一二	〇二	六八五
關東州(州內)	五	三	一四〇	五	六六	一、〇三五	四七	六六五
北海道	三四	三七	九五三	一四	三一〇	二、四〇〇	〇四	一、一二七
內地府縣	七九九	四四六	一七、七九九	三六八	四、三七七	五二、二九九	三八	一、〇四九

本表巡査一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。

臺灣の警察署には郡役所警察課及支廳を含む。

關東州警務署は警務署に、同支署は警務分署として掲上す。
朝鮮、樺太、關東州は同廳統計書に依る。
北海道、內地府縣は大正十三年四月一日現在にして第四十三回帝國統計年鑑に依る。

五一 最近十二年間の進步

	大正元年	同十二年	大正元年を百として の指數
人口			
總數	三、四三五、一七〇	三、九七六、〇九八	一一六
內地人	一二二、七九三	一八一、八四七	一四八
本島人	三、二一三、二二一	三、六八九、三七一	一一四
蕃人	八二、三七七	八四、一一七	一〇四
外國人	一七、九九九	三〇、七〇三	一七一
耕地			
總數	七二一、六八三甲	七五四、四〇〇甲	一〇五
田	三四六、三七四甲	三七六、七七七甲	一〇九
畑	三七四、九〇八甲	三七八、六二三甲	一〇一
農產	一四九、一七六、一二一圓	一六三、五九一、六三五圓	一二七
畜產	一五、六六八、七三四圓	一九、〇三五、六六八圓	一二一
林產	?	三、一九〇、一六九圓	?

鑛產	四、四八三、五六一圓	一二、九三〇、八六三圓	二八八
水產	三、三五〇、六八七圓	一五、八〇四、三〇六圓	四七二
工產	五二、〇三八、九二五圓	二〇四、一八八、〇三一圓	三九二
糖業			
甘蔗收穫面積	七五、三三九甲	一一六、六三〇甲	一五五
製糖高	二四九、三九九、七九九斤	七五三、六八三、八六四斤（大正十三年期）	三〇二
貿易			
總額	一二六、四一四、〇九五圓	三〇八、八二四、二九四圓	二四四
外國貿易	三四、二六七、三五四圓	六八、三六五、八〇四圓	一九九
內地貿易	九二、一四六、七四一圓	二四〇、四六〇、四九〇圓	二六四
財政			
歳入	六〇、二九五、八五八圓	一二一、〇九七、三五一圓	一八四
歳出	四七、一八八、五五六圓	八〇、七三八、九五一圓	一六六
專賣			
總額	一七、〇八三、三四六圓	四七、七二一、四五八圓	三

阿片賣渡價額	六、〇三七、八三六圓	五、六四〇、六六五圓	九三
食鹽賣渡價額	七四七、九三二圓	二、三八三、八三三圓	三一九
樟腦賣渡價額	五、七六五、〇三〇圓	一〇、三九九、三九八圓	一八〇
煙草賣渡價額	四、五五四、一四六圓	一〇、七五五、一四四圓	二三七
酒賣渡價額	—	八、一三三、五三九圓	—
教育			
小學校兒童	八、九八〇	三二、九八〇	三六七
公學校兒童	四九、五五四	二一三、一九五	四三〇
中等學校生徒	一、〇〇七	五、三三三	五二九
實業學校生徒	五六	一、八五一	三三一九
師範學校生徒	四四四	一、八〇三	四〇三
專門學校生徒	二二〇	八五四	三八八
鐵道			
官設鐵道線路延長	三〇三哩	五二三哩	一七三
運輸收入（乘客賃金）	二、三二五、八九四圓	五、七三〇、六七三圓	二四七
運輸收入（貨物賃金）	二、五四八、〇三四圓	七、三〇八、〇〇三圓	二八七

大正十四年六月廿八日印刷
大正十四年六月三十日發行

臺灣總督府

臺北市新起町一丁目十番地
印刷者　加藤豐吉

臺北市京町一丁目四十二番地
印刷所　小塚本店印刷工場

私設鐵道線路延長	八〇八哩	一、二六〇哩	一五六
郵便、電信及電話			
通常郵便引受通數	三〇、五七五、三二四	五六、〇七五、五五五	一八三
電報發信通數	九〇三、三六二	一、二五三、三三四	一三九
爲替振出金額	一四、三九七、〇四四圓	二三、七九二、三八四圓	一六五
貯金預入金額	三、一九六、三四四圓	一〇、二八九、一四三圓	三二二
電話（年度末現在加入者）	三、八六八	一一、〇一八	二八五
電話（通話度數）	一七、六〇四、六八〇	四二、六〇七、四四五	二四二